

第1章 共通教科に関する各教科

第1節 国 語

第1 国語科の基本的事項

1 改訂の趣旨

中央教育審議会の答申において、小・中・高等学校の国語科の成果と課題について、以下のような指摘がなされている。

- PISA調査の結果が、読解力に関して国際的に平均得点の高い上位グループに位置するものの、前回調査から平均得点が有意に低下しており、情報化の進展など、子供たちの言葉を取り巻く環境が変化している中、読解力に関する課題がみられること。
- 小中学校において、全国学力・学習状況調査等の結果を踏まえ、指導のねらいを明確にした言語活動の充実を踏まえた授業改善が図られおり、こうした流れを汲んで、高等学校国語科においても、従前から主体的な言語活動を重視した授業改善には取り組んできているが、更なる授業改善が必要とされていること。
- 高等学校では、文章の内容や表現の仕方を評価し目的に応じて活用すること、多様なメディアから読み取ったことを踏まえて自分の考えを根拠に基づいて的確に表現すること、国語の語彙の構造や特徴を理解すること、古典に対する学習意欲が低いことなどの課題があること。

これらを踏まえて改訂された高等学校学習指導要領の国語科の主な内容は、次のようなものである。

2 改訂の要点

(1) 目標及び内容の構成

ア 目標の構成の改善

国語科で育成を目指す資質・能力を「国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力」と規定するとともに、教科の目標を「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で整理した。また、このような資質・能力を育成するために、生徒が「言葉による見方・考え方」を働かせることが必要であることを示している。各科目の目標についても、教科の目標と同様に、上記の三つの柱で整理した。

イ 内容の構成の改善

三つの柱に沿った資質・能力の整理を踏まえ、従前、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の3領域及び「伝統的な言語文化と国語の特

質に関する事項」で構成していた内容を、「知識及び技能」及び「思考力、判断力、表現力等」に構成し直した。

(2) 科目構成の改善

共通必修科目として1科目の総合的な科目ではなく、2科目を新設し、各選択科目についても新設した。科目構成の改善について図示すると、次のようになる。

(単位数は標準単位数)

平成21年告示 学習指導要領	平成30年告示 学習指導要領
【共通必修科目】 国語総合（4単位）	【共通必修科目】 現代の国語（2単位） 言語文化（2単位）
【選択科目】 国語表現（3単位） 現代文A（2単位） 現代文B（4単位） 古典A（2単位） 古典B（4単位）	【選択科目】 論理国語（4単位） 文学国語（4単位） 国語表現（4単位） 古典探究（4単位）

(3) 学習内容の改善・充実

〔知識及び技能〕と〔思考力、判断力、表現力等〕の各指導事項について、育成を目指す資質・能力が明確になるよう内容を改善した。

- ① 語彙指導の改善・充実
- ② 情報の扱い方に関する指導の改善・充実
- ③ 学習過程の明確化、「考えの形成」の重視、探究的な学びの重視
- ④ 我が国の言語文化に関する指導の改善・充実
- ⑤ 「話すこと・聞くこと」及び「書くこと」に関する指導の改善・充実

後述の各科目の概要では、具体的な指導事項についてもより学習過程を明確化した。全ての領域において、自分の考えを形成する学習過程を重視し、「考えの形成」に関する指導事項を位置付けた。さらに、「考えの形成」のうち、探究的な学びの要素を含む指導事項を、全ての選択科目に位置付けた。なお、「国語表現」については、特定の指導事項ではなく「書くこと」の学習過程全体に探究的な学びの要素を位置付けている。

また、指導事項については、従前と違い、「○言葉の働き」のように○を用い箇条書きで示している。これは、これらの指導事項を示す順序が、単に指導の順序性を示すものではないということを示している。

(4) 学習の系統性の重視

国語科の指導内容は、小・中学校での指導を受けて、〔知識及び技能〕の指導事項及び〔思考力、判断力、表現力等〕の指導事項と言語活動例のそれぞれにおいて、重点を置くべき指導内容を明確にし、その系統化を図った。

(5) 授業改善のための言語活動の創意工夫

〔思考力、判断力、表現力等〕の各領域において、どのような資質・能力を育成するかを(1)の指導事項に示し、どのような言語活動を通して資質・能力を育成するかを(2)の言語活動例に示すという関係を明確にするとともに、各学校の創意工夫により授業改善が行われるようにする観点から、従前に示していた言語活動例を言語活動の種類ごとにまとめた形で示した。

なお、当該領域において示した資質・能力は言語活動を通して育成する必要があるが、従前と同じく、例えば、話し合いの言語活動が、必ずしも「話すこと・聞くこと」の領域の資質・能力のみの育成を目指すものではなく、「書くこと」や「読むこと」における言語活動にもなりうることに示されるとおり、育成を目指す資質・能力（目標）と言語活動とを同一視しないよう十分留意する必要がある。

(6) 各領域の授業時数、取り上げる教材の明確化

〔思考力、判断力、表現力等〕の各領域の指導事項に示した資質・能力が確実に育成されるよう、これまで共通必修科目の「話すこと・聞くこと」及び「書くこと」の領域に示していた授業時数を、複数の領域をもつ全科目について設定した。（下表参照）

教材については、特に「読むこと」の指導で取り上げる教材について、科目の性格に応じて、より明確に設定した。

(7) 読書指導の改善・充実

各科目において、国語科の学習が読書活動に結びつくよう、〔知識及び技能〕に「読書」に関する指導事項を位置付け、「読むこと」の領域では、学校図書館などを利用して様々な本などから情報を得て活用する言語活動例を示した。

なお、国語科の学習における読書とは、本を読むことに加え、新聞、雑誌を読んだり、何かを調べるために関係する資料を読んだりすることを含んでいることに留意する必要がある。

各科目の内容の〔思考力、判断力、表現力等〕の構成及び「内容の取扱い」に示された各領域における授業時数

科目 (標準単位数)	〔思考力、判断力、表現力等〕		
	話すこと・ 聞くこと	書くこと	読むこと
現代の国語 (2)	20～30 単位時間 程度	30～40 単位時間 程度	10～20 単位時間 程度
言語文化(2)		5～10 単位時間 程度	【古典】 40～45 単位時間 程度
			【近代以降の文章】 20 単位 時間程度
論理国語 (4)		50～60 単位時間 程度	80～90 単位時間 程度
文学国語 (4)		30～40 単位時間 程度	100～110 単位時間 程度
国語表現 (4)	40～50 単位時間 程度	90～100 単位時間 程度	
古典探究 (4)			※

※「古典探究」は一領域のため、授業時数を示していない。

3 国語科の目標及び科目等

高等学校国語は、小学校、中学校及び高等学校の一貫性を図るとともに、高等学校の段階に即して、より高い目標を掲げている。

教科の目標の中に示した資質・能力は、有機的に関連し合うものであり、そうした関連に十分留意して、効果的な指導がなされるようにしなければならない。また、理解と表現の資質・能力も個別に存在するのではなく、両者は密接に関わっている。話したり聞いたり書いたり読んだりする言語活動の密接な関連の中で、表現と理解の資質・能力を調和的に育成していくことが大切となる。

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 生涯にわたる社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。
- (2) 生涯にわたる社会生活における他者との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を伸ばす。

(3) 言葉のもつ価値への認識を深めるとともに、言語感覚を磨き、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、生涯にわたり国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

4 指導計画作成上の配慮事項

(1) 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善
これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けるようにするためには、埼玉県におけるこれまでの優れた教育実践の蓄積も生かしながら、学習の質を一層高める授業改善に取り組むことが大切である。特に、本県で平成22年から取り組んでいる協調学習は、「主体的・対話的で深い学び」を実現する上で有効な「学び」の一つである。

指導計画の作成に当たっては、言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通じて、言葉の特徴や使い方などを理解し、自分の思いや考えを深める学習の充実を図るよう配慮する。

主体的・対話的で深い学びは、必ずしも1単位時間の授業の中で全てが実現されるものではない。単元など内容や時間のまとまりの中で、生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるか、といった観点で授業改善を進めることが求められる。

例えば、単に一作品の読了を目指した授業に終始するだけでなく、文学的文章の理解を深めるために、作家論や作品論の知見を用いて、知識構成型ジグソー法による協調学習を取り入れるなどの工夫が考えられる。

(2) 各科目の履修に関する配慮事項

選択科目については、原則として「現代の国語」及び「言語文化」を履修した後に履修させるとしているだけで、選択科目相互の履修順序は示していない。ここで原則としてとしているのは、例えば、「現代の国語」、「言語文化」を2以上の連続する年次にわたって分割履修するような場合に、2年次目においては、選択科目を同時に履修することができることを可能とするものである。

(3) 〔知識及び技能〕に示す事項の指導

各科目の内容の〔知識及び技能〕に示す事項は〔思考力、判断力、表現力等〕に示す事項の指導を通して行うことを基本とすることを示したものである。〔知識及び技能〕に示す事項が生きて働く資質・能力として育成されるためには、〔思考力、判断力、表現力等〕に示す各事項との関連が図られることが重要である。

〔知識及び技能〕に示す事項のみを取り上げて繰り返し指導したり、まとめて単元化して扱ったりすることは最小限にとどめる必要がある。

(4) 中学校との関連

「現代の国語」及び「言語文化」は、いずれも共通必修科目であり、中学校を卒業した全ての生徒が、原則として、選択科目に先じて高等学校で履修する科目である。したがって、これらの科目の指導については、中学校国語科との関連について十分配慮することが必要である。

従来に引き続き、学校や生徒の実態等に応じて義務教育段階の学習内容の確実な定着を図るための指導を行うことを指導計画の作成に当たって配慮すべき事項として示し、生徒が高等学校段階の学習に円滑に移行できるようにすることを重視する。

(5) 他教科等との関連

全ての教科等における学習の基盤となる言語能力の育成に向けて、国語科が中心的な役割を担いながら、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図ることが重要である。

指導計画の作成に当たっては、他教科等の内容の系統性や関連性を考慮することが求められる。その際、国語科と同様、言語を直接の学習対象とする外国語科との連携は特に重要なものとなる。

また、国語科においては、国語で的確に理解したり効果的に表現したりする資質・能力を育成する上で、生涯にわたる社会生活における他者との関わりの中で伝え合う力を高めることは、学校の教育活動全体で道徳教育を進めていくための基盤となるものである。

(6) 障害のある生徒などへの指導

国語科の目標や内容の趣旨、学習活動のねらいを踏まえ、学習内容の変更や学習活動の代替を安易に行うことがないよう留意するとともに、生徒の学習負担や心理面にも配慮する必要がある。

5 内容の取扱いに当たっての配慮事項

(1) 言語活動に関する配慮事項

〔知識及び技能〕に示す事項は、生きて働く「知識及び技能」として習得することが求められる。指導に当たっては、生徒が、日常の言語活動の中にある言葉の特徴やきまりなどに気付くことや、学習したことを日常の話したり聞いたり書いたり読んだりする場面に生かすことを意識しながら学習できるようにすることが重要である。

(2) 読書、文字・活字文化に関する配慮事項

今後ますます情報化が進展する社会において、よりよく生きるために、読書の幅を広げ、読書の習慣を養うことの重要性は一層高まっていくことを認識する必要がある。

(3) 情報機器の活用等に関する配慮事項

国語科の学習においても、情報収集や情報発信の手

段として、インターネットや電子辞書等の活用、コンピュータによる発表資料の作成やプロジェクターによる提示など、コンピュータや情報通信ネットワークを活用する機会を設けることが重要である。

(4) 学校図書館等の利活用に関する配慮事項

〔知識及び技能〕及び〔思考力、判断力、表現力等〕に示す事項の指導に当たっては、本などの種類や配置、探し方など、中学校で学習した内容を踏まえながら、学校図書館などを利用する目的を明確にした上で計画的に利用し、これらの活用を図ることが必要である。

(5) 教材についての留意事項

生徒の発達の段階に即して適切な話題や題材、話や文章の種類などを調和的に選定し、特に、〔思考力、判断力、表現力等〕においては、各領域の指導が適切に行われるよう、年間を通してバランスよく教材を配当することが重要である。

また、国語科はとかく文字言語だけを教材としがちであるが、それだけではなく、必要に応じて、音声言語や画像による種々の教材も使い、〔知識及び技能〕及び〔思考力、判断力、表現力等〕の全般にわたって学習の効果を高めるようにする必要がある。

理している。実社会で求められる国語の資質・能力の育成に主眼を置くことから、「知識及び技能」においては、「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」、
「(2)情報の扱い方に関する事項」を充実させ、「思考力・判断力・表現力等」においては、これまで指導が不十分であると指摘されてきた、「A 話すこと・聞くこと」、「B 書くこと」の指導事項を充実させている。

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けるようにする。
- (2) 論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。
- (3) 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。

第2 各科目の概要

1 「現代の国語」

(1) 性格及び目標

知識基盤社会の到来や情報科学の発達、グローバル化の一層の進展など、これからの社会は予測困難で複雑なものとなっていくことが予想される。これからの社会に主体的に関わり、他者と協働して課題を解決したり、様々な情報を見極め、知識の再構築を行い、新たな価値を生み出したりする資質・能力の育成が求められる。こうした資質・能力の育成において、論理的思考力、相互に交流する力、情報の適切な判断力といった実社会で求められる言語能力の育成に主眼をおいた国語教育は重要な役割を果たす。このことを踏まえ、「現代の国語」は、実社会における国語による諸活動に必要な資質・能力の育成に主眼を置く共通必修科目として新設された。小・中学校の内容を発展させ、他の教科等の学習の基盤、とりわけ言語活動の充実や実社会における国語による諸活動に資する資質・能力の基礎を身に付けることをねらいとしている。その目標は、教科の目標と同様、育成を目指す資質・能力を「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で整

(2) 内容

〔知識及び技能〕

- ① 言葉の特徴や使い方に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

○言葉の働き

ア 言葉には、認識や思考を支える働きがあることを理解すること。

言葉は認識や思考を確かなものにする際に不可欠なものである。ここでいう認識とは、事物の内容をとらえ、考えたり思ったりしたことをもとに、その本質や意義を理解することである。思考とは、単に思うことと考えることだけではなく、認識の結果得られた情報を精査し、構造化し、推論し、論理を深めることでもある。

○話し言葉と書き言葉、言葉遣い

イ 話し言葉と書き言葉の特徴や役割、表現の特色を踏まえ、正確さ、分かりやすさ、適切さ、敬意と親しさなどに配慮した表現や言葉遣いについて理解し、使うこと。

話し言葉には、相手とのその場でのやりとりを通じて、考えを確かなものにしたたり、相手を説得したり共感を得たりする役割がある。書き言葉には、推敲を加えながら情報を整理して表現を整えることで、考えを確かなものにし、読み手に確実に情報を

届ける役割や、読み手が必要に応じていつでも参照できるようにする役割がある。ここではそれぞれに独自の役割があることを理解し、適切に使っていくことを求めている。話し言葉と書き言葉を、相手や場面の状況に応じて、適切に用いることで、互いが十分に情報を理解したり、心地良い距離感に立って伝え合ったりできる。場面の状況に応じた言葉の特徴や役割を持たせることができているか、待遇表現や親しさを示す表現が相手との心理的な距離を適切に保っているかに留意することが求められる。

○漢字

ウ 常用漢字の読みに慣れ、主な常用漢字を書き、文や文章の中で使うこと。

主な常用漢字の読みに慣れ、書けるようになることを示している。生徒の実態にもよるが、漢字のみを取り出して指導するのではなく、文や文章の中で実際に用いながら指導することが求められる。また、「言語文化」と同一の指導が無計画に行われることが無いよう、2つの共通必修科目における学習の関連を図るよう留意する必要がある。

○語彙

エ 実社会において理解したり表現したりするために必要な語句の量を増すとともに、語句や語彙の構造や特色、用法及び表記の仕方などを理解し、話や文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすること。

実社会に出た際に必要な語句の量を増すことを求めている。語と語の組み合わせ方や結び付き方、語句相互の関連性や、個々の語句の特色を踏まえて、語句を積極的に使っていくことで語感を磨き、語彙を豊かにすることが大切である。

○文や文章

オ 文、話、文章の効果的な組立て方や接続の仕方について理解すること。

文、話、文章の効果的な組立て方については、文の成分を効果的に組み立てる方法や、中心文を段落のどの位置にどのように置かかによって話や文章の伝わり方が変わってくるなどを理解する必要がある。接続の仕方については、単に接続詞などの接続の語句だけではなく、文の成分同士、文同士、段落同士の接続についても、理解する必要がある。

○表現の技法

カ 比喩、例示、言い換えなどの修辞や、直接的な述べ方や婉曲的な述べ方について理解し使うこと。

実社会の様々な場面で用いられる表現の技法や直接的な述べ方や婉曲的な述べ方について理解し、文章の中で適切に使うことを示している。修辞には

「比喩」「例示」「言い換え」の他にも、「反語」や「同語反復」など様々なものがある。「直接的な述べ方」とは自分の意向を単刀直入に伝える述べ方で、「婉曲的な述べ方」とは背景にある事情や状況を示すことで、相手に自分の意向を汲んでもらおうとする述べ方である。それぞれの特徴をよく理解し、相手や状況に応じて適切に使い分けことが大切である。

② 話や文章に含まれている情報の扱い方に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

○情報と情報の関係

ア 主張と論拠など情報と情報との関係について理解すること。

イ 個別の情報と一般化された情報との関係について理解すること。

アでは、主張の論拠を明確に示すことで、個々の情報同士を適切に関係付け、論拠が、主張の根拠として妥当であると示すことができることを求めている。

イの個別の情報と一般化された情報の関係においては、単に個別の情報同士の共通点を捉えてラベルを付すのみではなく、相互に関連付け、一つ概念にまとめることで、一般化された情報を得ることが重要である。この両者を適切に関連付ける力を身に付けることは、自分の考えの妥当性を示すために必要である。

○情報の整理

ウ 推論の仕方を理解し使うこと。

エ 情報の妥当性や信頼性の吟味の仕方について理解を深め使うこと。

オ 引用の仕方や出典の示し方、それらの必要性について理解を深め使うこと。

ウでは、演繹・帰納・仮説形成など、様々な推論の仕方を日常的な思考の中で意識的に使うことを求めている。

エでは、主張を裏付ける根拠として適切であるだけでなく、情報が正しく信頼できるものであるか、吟味することが求められている。

オについては、新聞やウェブサイトなどの多様な情報を引用することで、自らの主張を補強し、説得力を高めることができることが示されている。その出典を適切に示して書くことによって、主張に妥当性や信頼性が生まれる。

③ 我が国の言語文化に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

○読書

ア 実社会との関わりを考えるための読書の意義と効

用について理解を深めること。

実社会における、政治や経済、社会など幅広い分野の出来事と自分自身との関わりについて考えるための読書の意義と効用について理解を深めることを示している。一冊の図書だけをじっくりと読むだけでなく、複数の図書や資料などを読み比べながら、趣旨の違いを捉える活動なども考えられる。

〔思考力、判断力、表現力等〕

A 話すこと・聞くこと

① 話すこと・聞くことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

○話題の設定、情報の収集、内容の検討

ア 目的や場に応じて、実社会の中から適切な話題を決め、様々な観点から情報を収集、整理して、伝え合う内容を検討すること。

話題を決める範囲を実社会とし、情報を収集することまで求めている。例えば、社会的な話題や国際的や話題について、様々な媒体を通じて伝えられることに加え、専門的な研究の成果やインタビューなども含めて情報を収集、整理する活動が考えられる。伝え合う内容を検討する際には、発想や視点を広げることが重要である。また、伝え合う内容を検討するためには、目的や場に照らしてふさわしいかどうかを考えることや、話題を選択するために必要な観点や基準を事前に確認することが必要である。特に、実務的な内容を伝える場合には、その目的に十分即して内容を検討する必要がある。

○構成の検討、考えの形成（話すこと）

イ 自分の考えが的確に伝わるよう、自分の立場や考えを明確にするとともに、相手の反応を予想して論理の展開を考えるなど、話の構成や展開を工夫すること。

聴衆（相手）にどのように意味や内容が把握されるのかを念頭に置き、その反応を予想した上で論理の展開や話の組み立てを考えることを示している。論理的に説明するためには、目的と相手（聴衆）にふさわしい話の構成や展開を工夫することが必要である。

○表現、共有（話すこと）

ウ 話し言葉の特徴を踏まえて話したり、場の状況に応じて資料や機器を効果的に用いたりするなど、相手の理解が得られるように表現を工夫すること。

内容が相手に正確に伝わるように、話し言葉の特徴を考慮し、例えば同音異義語を用いることで誤解を避けるなど、適切な言葉を選んで話すことを示している。相手の理解が得られるようするにはプレゼンテーションソフトを含めたICT機器を活用する

ことも効果的であることから、情報科と連携して指導することが考えられる。

○構造と内容の把握、精査・解釈、考えの形成、共有（聞くこと）

エ 論理の展開を予想しながら聞き、話の内容や構成、論理の展開、表現の仕方を評価するとともに、聞き取った情報を整理して自分の考えを広げたり深めたりすること。

論理の展開を予想するためには、例えば結論が先に出された場合に、続く例示との関係を考えながら聞くなど、要点を的確に聞き取り、主張や結論、話の筋道などを想定することが求められる。聞いたことを対象化して理解し、情報そのものや情報同士の関係の妥当性を検討したうえで、聞いたことを評価したり、整理したりすることで、自分の考えを広げたり、深めたりすることができる。

○話合いの進め方の検討、考えの形成、共有（話し合うこと）

オ 論点を共有し、考えを広げたり深めたりしながら、話合いの目的、種類、状況に応じて、表現や進行など話合いの仕方や結論の出し方を工夫すること。

話合いの目的や状況に応じて話合いの種類（方法・形態）を選択し、表現や進行を工夫して結論を導くことは、実社会で行われる話合いそのものである。ブレインストーミングやシンポジウム、パネル・ディスカッションといった話合いの種類を知るだけでなく、実例を参考にして理解し、実際に取り組んでの長所・短所を体感できるようにするなど、指導に工夫が必要である。

② ①に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。

ア 自分の考えについてスピーチをしたり、それを聞いて、同意したり、質問したり、論拠を示して反論したりする活動。

イ 報告や連絡、案内などのために、資料に基づいて必要な事柄を話したり、それらを聞いて、質問したり批評したりする活動。

ウ 話合いの目的に応じて結論を得たり、多様な考えを引き出したりするための議論や討論を、他の議論や討論の記録などを参考にしながら行う活動。

エ 集めた情報を資料にまとめ、聴衆に対して発表する活動。

「話すこと」と「聞くこと」の両方を含む活動や、聴衆を意識した活動が例示されている。実際にスピーチや討論を行うだけでなく、ICT機器を活用して、他のスピーチや討論の記録を参考にすること

とや、自分たちのスピーチや討論を映像や文字媒体で記録したものを題材として、話の構成や論理の展開について即時的に振り返り、検討する活動などが有効であると考えられる。また、異なる複数のスピーチ映像を題材とし、スピーチを行う際の重点事項を、協調学習の手法を用いて検討するといった活動も考えられる。

B 書くこと

① 書くことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

○題材の設定、情報の収集、内容の検討

ア 目的や意図に応じて、実社会の中から適切な題材を決め、集めた情報の妥当性や信頼性を吟味して、伝えたいことを明確にすること。

題材を決める範囲を実社会とし、情報の妥当性や信頼性を吟味することまで求めている。実体験や他教科等での学習経験と関連付けて題材を決めることや、情報を幅広く収集することに留意する必要がある。ICT機器の活用に加えて、マトリックス、ピラミッドチャートなど、情報の可視化に資する思考ツールを用いることも有効である。

○構成の検討、考えの形成、記述

イ 読み手の理解が得られるよう、論理の展開、情報の分量や重要度などを考えて、文章の構成や展開を工夫すること。

ウ 自分の考えや事柄が的確に伝わるよう、根拠の示し方や説明の仕方を考えるとともに、文章の種類や、文体、語句などの表現の仕方を工夫すること。

イにおいて、読み手の理解を得るためには、結論や主張を導くための筋道の通った考えの進め方について考え、読み手の関心や知識などを想定し、情報の分量の多寡や重要度の高さ、情報の種類を工夫することが大切である。文章の構成や展開については、読み手や情報に合わせて、頭括型、尾括型、双括型などの文章の組立て方や、推論の仕方を使い分ける必要がある。

ウについては、自分の伝えたい考えや事柄が、間違いなくかつ過不足なく読み手に伝わる大切である。ここでいう文章の種類とは、説明、論説、評論、記録、報告、報道、手紙といった、論理的または実用的な非文学の文章を指す。これらの文章においては、説明の順序を工夫する、相手に応じてより平易な語句を用いる、和語と漢語を工夫して用いるといったことが求められる。

○推敲、共有

エ 目的や意図に応じて書かれているかなどを確かめて、文章全体を整えたり、読み手からの助言などを

踏まえて、自分の文章の特長や課題を捉え直したりすること。

自分で推敲だけでなく、読み手からの助言を受けて自分の文章を見直すことが示されている。教師が読み手となって評価することに加え、例えば、評価の観点を示したルーブリックを用いて生徒同士による相互評価を行い、複数の読み手から助言を受けるだけでなく、読み手として評価した文章と自分の文章とを比較させるといった工夫が考えられる。

② ①に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。

ア 論理的な文章や実用的な文章を読み、本文や資料を引用しながら、自分の意見や考えを論述する活動。

イ 読み手が必要とする情報に応じて手順書や紹介文などを書いたり、書式を踏まえて案内文や通知文などを書いたりする活動。

ウ 調べたことを整理して、報告書や説明資料などにまとめる活動。

アは、現代の社会生活に必要とされる非文学の文章や関連する他の資料を適切に引用することで、自分の意見や考えを補強して説得力を高めたり、論点を提示したりしながら論述する活動である。資料を引用する際の基本的なルールに留意する必要がある。

イの手順書や紹介文には、取扱説明書（マニュアル）や本の紹介、製品のカタログ、広告、宣伝などがある。生徒会の予算請求手順を示したマニュアルを作成するなど、読み手が必要とする情報を的確に捉えたり想定したりして書く活動が考えられる。

ウの報告書や説明資料は、社会的な事象とその原因や対策を事実としてまとめたり、要点を的確に再整理したりしたものである。調べたことの羅列だけではなく、思考の過程を経て導き出された考察が含まれるよう、指導の工夫が必要である。

C 読むこと

① 読むことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

○構造と内容の把握

ア 文章の種類を踏まえて、内容や構成、論理の展開などについて叙述を基に的確に捉え、要旨や要点を把握すること。

文章の種類によって、書かれる目的や表現方法、書式などは異なる。それぞれの文章の特徴を捉えた上で読み、書き手が自身の主張を支えるために、文章の材料として何を選び、どう組み立て、どんな筋道で考えなどを述べているのかを、叙述を基に的確

に捉えることを求めている。

○精査・解釈，考えの形成，共有

イ 目的に応じて，文章や図表などに含まれている情報を相互に関係付けながら，内容や書き手の意図を解釈したり，文章の構成や論理の展開などについて評価したりするとともに，自分の考えを深めること。

文章が書かれた目的をおさえ，書き手の思考の流れ，考えの強調点を読み取り，なぜこのように書いたのかに迫ることを示している。様々な形式の文章が組み合わさったものや，図表を伴う文章においては，個々の情報がどのように相互に関連していて，どのような効果が生まれているかを考える必要がある。文章の構成や論理の展開の適否を判断したり，情報を多角的に検討したりして評価することは，批判的に読むことの基本となり，自分の考えを深めることにつながる。

② ①に示す事項については，例えば，次のような言語活動を通して指導するものとする。

ア 論理的な文章や実用的な文章を読み，その内容や形式について，引用や要約などをしながら論述したり批評したりする活動。

イ 異なる形式で書かれた複数の文章や，図表等を伴う文章を読み，理解したことや解釈したことをまとめて発表したり，他の形式の文章に書き換えたりする活動。

文章を読み，内容や形式について論述したり批評したりする活動や，形式の異なる複数の文章や図表等を伴う文章を読み，理解したことを発表したり他の形式の文章に書き換えたりする活動など，複合的な活動が示されている。具体的には，協調学習の手法を用いて，複数の論説文や意見文，新聞記事などを読み比べることで多くの文章に触れ，内容や形式について複数回批評したり，解釈したりする活動が考えられる。

(3) 内容の取扱い

① 内容の〔思考力，判断力，表現力等〕における授業時数については，次の事項に配慮するものとする。

ア 「A 話すこと・聞くこと」に関する指導については，20～30単位時間程度を配当するものとし，計画的に指導すること。

実際に話したり，聞いたり，話し合ったりしている時間だけではなく，話題について検討したり，資料をまとめたりする時間なども含めている。従前の国語総合と比べて配当時間が増加しているのは，科目の性格を踏まえたためである。また，20～30単位

時間と幅をもたせたのは，学校や生徒の実態に応じて弾力的な指導を可能とするためである。各学校で適切な年間計画を策定することが求められる。

イ 「B 書くこと」に関する指導については，30～40単位時間程度を配当するものとし，計画的に指導すること。

実際に文章を書いている時間だけではなく，題材を選んだり，参考となる文章や資料を読んだり，情報を整理したりする時間も含めている。前項と同様の理由から時間配分には幅を持たせている。

ウ 「C 読むこと」に関する指導については，10～20単位時間程度を配当するものとし，計画的に指導すること。

実際に文章を読んでいる時間だけではなく，読んで形成させた考えについて話したり聞いたり書いたりする時間も含めている。前項と同様の理由から時間配分には幅を持たせている。

② 内容の〔知識及び技能〕に関する指導については，次の事項に配慮するものとする。

ア ①のウの指導については，「言語文化」の内容の〔知識及び技能〕の①のイの指導との関連を図り，計画的に指導すること。

共通必修科目相互の関連を図り，計画的に指導することで，常用漢字の音訓を正しく使えるようにするとともに，主な常用漢字が文脈に応じて書けるようになることを求めている。他教科等の学習に必要な漢字については，指導する時期や内容を意図的，計画的に位置付けるなど，当該教科等と関連付けた指導を行うことが必要である。あわせて，具体的な用例で示したりするなど，生徒の学習意欲が高まるようにすることも必要である。

③ 内容の〔思考力，判断力，表現力等〕に関する指導については，次の事項に配慮するものとする。

ア 「A 話すこと・聞くこと」に関する指導については，必要に応じて口語のきまり，敬語の用法などを扱うこと。

小学校及び中学校を通して一貫して指導している口語のきまり，敬語の用法などを必要に応じて更に深め，実際の言語活動において用いることができるようにすることが大切である。

イ 「B 書くこと」に関する指導については，中学校国語科の書写との関連を図り，効果的に文字を書く機会を設けること。

中学校までに身に付けてきた書写の能力を総合的に発揮させ，実社会・実生活の中で文字を書くことを工夫し，様々に書き分けることができるよう，効果的に文字を書く機会を積極的に設けることが大切

である。文字を効果的に書く意味や役割についても併せて考えさせたい。

- ④ 教材については、次の事項に留意するものとする。

ア 内容の〔思考力、判断力、表現力等〕の「C 読むこと」の教材は、現代の社会生活に必要とされる論理的な文章及び実用的な文章とすること。

現代の社会生活に必要とされる論理的な文章とは、説明文、論説文や解説文、評論文、意見文や批評文などのうち、主として現代の社会生活に関するテーマを取り上げていたり、現代の社会生活に必要な論理の展開が工夫されていたりするものなどを指している。実用的な文章とは、報道の文章や案内、報告書、企画書、法令文、キャッチフレーズ、電子メールなどである。

実用的な文章には、図表や写真などを伴う文章が多いことから、指導のねらいに応じて、これらを教材として適宜取り上げることが必要であるが、表やグラフの読み取りが学習の中心の指導とならないよう留意する必要がある。

イ 内容の〔思考力、判断力、表現力等〕の「A話すこと・聞くこと」、「B書くこと」及び「C読むこと」のそれぞれの②に掲げる言語活動が十分行われるよう教材を選定すること。

2 「言語文化」

(1) 性格及び目標

急速なグローバル化が進展するこれからの社会においては、異なる国や文化に属する人々との関わりが日常的になり、国際社会に対する理解を深めるとともに、自らのアイデンティティーを見極め、我が国の一員としての責任と自覚を深めることが重要とされている。そこで、先人が築き上げてきた伝統と文化を尊重し、豊かな感性や情緒を養い、我が国の言語文化に対する幅広い知識や教養を活用する資質・能力の育成が必要である。

このことを踏まえ、「言語文化」は、上代から近現代に受け継がれてきた我が国の言語文化への理解を深めることに主眼を置き、全ての生徒に履修させる共通必修科目として新設したものである。選択科目や他の教科・科目等の学習の基本、とりわけ我が国の言語文化の担い手としての自覚を涵養し、社会人として、生涯にわたって生活するために必要な国語の資質・能力の基礎を確実に身に付けることをねらいとしている。

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けるようにする。
- (2) 論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。
- (3) 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。

(2) 内容

〔知識及び技能〕

- ① 言葉の特徴や使い方に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

○言葉の働き

ア 言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解すること。

先人の築いてきた文化を自らに深く関わるものとして受け止め、その価値を高め、新たな文化を生み出すことが求められている。そこには、必ず先人の言葉が介在し、また言葉それ自体が文化であることを意識することが重要である。

○漢字

イ 常用漢字の読みに慣れ、主な常用漢字を書き、文や文章の中で使うこと。

中学校までの漢字の学習の上に立ち、主な常用漢字が文脈に応じて書けるようにする。短時間のテストを継続的に実施したり、漢字の学習だけをまとめて練習したりすることは望ましくない。特に、漢字の指導については、「現代の国語」との関連を図る必要がある。2つの共通必修科目において、無計画に同一の指導を行わないことや、漢字に関する知識・技能が偏らないよう計画的に指導することが求められる。

○語彙

ウ 我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすること。

文化的背景を持つ言葉については、例えば、「時雨」、「五月雨」、「むらさめ」、「驟雨」など、雨を細かく言い分ける語や、「わび」、「さび」、「あはれ」、「不易流行」など、日本的な美意識を表す語などのように、英語など他の言語には見られない、国語に特徴的な語句などが指摘できる。語句の意味や、単に用法を

理解するだけでなく、古典のほか、近現代の小説や詩歌、芸能などに触れる中で、これらの語句を理解するとともに、自らも使うことで語感を磨き、語彙を豊かにすることが必要である。

○文や文章

エ 文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解すること。

文脈が異なることによって文章の意味が異なることや、文脈を通じて、文章に奥行きや含蓄を持たせることなど、文脈は、我が国の言語文化を支えている。

○表現の技法

オ 本歌取りや見立てなどの我が国の言語文化に特徴的な表現の技法とその効果について理解すること。

本歌取りや見立てなどは、二つの世界を重ねて表現する技法であるが、本歌取りはもちろん、見立てなどの技法に加えて、掛詞や枕詞など和歌における修辞なども我が国の言語文化に特徴的な表現の技法と考えることができる。

これらの表現技法を単に個別の知識として理解するのではなく、実際に文章や作品を読む中で作品に奥行きが生まれたり、意図が明確に伝わるといった効果を理解し、その効果を期待して文章や作品を書く際に使ったりすることができるようにすることが重要である。

② 我が国の言語文化に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

○伝統的な言語文化

ア 我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解すること。

我が国の言語文化として重要な位置を占めている古典や近代以降の文章を読み、それぞれの時代や社会の姿、その中で言語文化を生み出した人々のものの見方、感じ方、考え方に触れることを通して、作品一つ一つに表れた個性と価値、作品を集合的に捉えた時代全体の特質、さらに近現代につながる我が国の言語文化全体の独自性を理解することが重要である。また我が国は中国の文化の受容と変容を繰り返しつつ独自の文化を築きあげてきたことから、古文と漢文の両方を学ぶことを通して両文化の関係に気付くことが大切である。中国に限らず、南蛮渡来といわれた、近世以前のヨーロッパの文化の影響や、近代以降の西洋を中心とした諸外国からもたらされた思想や事物が、我が国の近現代の言語文化の形成に大きな影響を与えてきたことなどを踏まえることも重要である。

イ 古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・

文化的背景などを理解すること。

古典の世界に親しむとは、古典の世界に対する理解を深めながら、その世界を自らとかけ離れたものと感じることなく、身近で好ましいものと感じて興味・関心を抱くことである。作品や文章に関する当時の生活様式や社会制度、人々の価値観、人生観、美的観念などを単なる断片的な知識として理解するのではなく、作品や文章に対する影響を与えたものとして理解することを通して、古典の世界のもつ豊穡さや魅力に気付かせることが重要である。

ウ 古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまり、古典特有の表現などについて理解すること。

古典を読むためには、文語のきまりや訓読のきまり、古典特有の表現などについて理解することは大切であるが、あくまでも、古典の世界に親しむことを目指していることに留意する必要がある。文語文法だけの学習の時間を長期にわたって設けることは望ましくない。単に知識を理解させることに終始するのではなく、古典に親しむことを重視し、様々な言語活動を通して指導する必要がある。

エ 時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解すること。

時間の経過による文字の変化とは、まず中国から借りてきた漢字のみを用いて書くことから始まり、やがて漢字を省略したり崩したりした片仮名、平仮名を漢字とともに組み合わせて用いるようになったことである。一方、時間の経過による言葉の変化は、古語と現代語の意味の変化や違いを認識し、方言など地域の特徴的な言葉と関係しているものがあることを理解することも必要である。また地域の文化的特徴には、昔の都の言葉が残存するものだけではなく、地域の風土や伝統に由来する言葉の違いが見られる場合も多い。

ことわざや故事成語をはじめ、日常生活で使われている現代の言葉の多くが古典の言葉や出来事などに由来していることや、その言葉が現代に引き継がれていることを意識し、言葉が、継承すべき文化遺産であることを認識することが大切である。

オ 言文一致体や和漢混交文など歴史的な文体の変化について理解を深めること。

文体の変化は、文字や言葉の変化と密接な関係にある。現代の文体は、和文と漢文訓読文の並立から和漢混合文へ、そして言文一致体へという歴史的流れの中にあることを理解することが大切である。

○読書

カ 我が国の言語文化への理解につながる読書の意義と効用について理解を深めること。

物語や小説にとどまらず、韻文や脚本、随筆、文化を論じた評論など幅広く読み、人間、社会、自然などについて考えたり、当時の人々のものの見方、感じ方、考え方を味わったりすることが大切である。読書を通して上代から近現代までの言語と文化のつながりについて多様な視点で考えたり、新たな認識を深めたりすることが求められている。

【思考力、判断力、表現力等】

A 書くこと

① 書くことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する

○題材の設定、情報の収集、内容の検討

ア 自分の知識や体験の中から適切な題材を決め、集めた材料のよさや味わいを吟味して、表現したいことを明確にすること。

日々の体験から四季の変化を細やかに感じ取ることや、読書などを通して理解した我が国の言葉や文化の特質（「もののあはれ」等）に興味関心を持つこと、それらがどのような文化的価値を有しているのかを理解した上で、メモなどの覚書や図などの視覚的な素材を用いて、表現したいことがより明確になるような工夫をすることが求められる。

○構成の検討、考えの形成、記述、推敲、共有

イ 自分の体験や思いが効果的に伝わるよう、文章の種類、構成、展開や、文体、描写、語句などの表現の仕方を工夫すること。

ここでの文章の種類とは、具体的には詩歌、小説、随筆、戯曲などを指している。読み手を想定し、誰に何のためにどのようなことを伝えようとしているのかを意識し、文章の組立て方、述べる順序、文の長短、文章の展開等を考え、効果的に表現することが求められる。詩歌を例に挙げた場合、体言止め、対句、擬人化、倒置法、押韻といった技法を理解することで、より効果的な表現をすることが求められる。

② ①に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。

ア 本歌取りや折句などを用いて、感じたことや発見したことを短歌や俳句で表したり、伝統行事や風物詩などの文化に関する題材を選んで、随筆などを書いたりする活動。

単に短歌や俳句をつくって紹介したりするのではなく、表現したい題材やテーマ、収集した材料に自らを取り巻く文化的価値がどのように認められるか、

参考とした和歌などに言語文化としてどのような特徴や価値があるかなどについて考えさせることが重要である。随筆については、地域における祭りなどの伝統行事や季節の情趣を象徴した風物詩など、文化に関する題材を設定し、自分が感じたことや考えたことなどを、自分との関わりを踏まえて書かせるとうまい。

これらの活動は、名歌や名句、名随筆などの創作を追求するための優劣を競うことが目的ではなく、創作するという活動を通して、書く資質・能力を高めるとともに、我が国の言語文化に対する理解を深めることが大切である。

B 読むこと

① 読むことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

○構造と内容の把握

ア 文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えること。

文語文と口語文、韻文体と散文体等文体による整理や、実用的な文章、論理的な文章や文学的な文章などにおける書き手の目的や意図、虚構性の有無などによる整理をし、対象となる文章が、これらのどれに属し、どのような特徴をもっているのかを把握していく。

近代以降の評論や論説などの論理的な文章について、我が国の伝統と文化について扱う。書き手が、何を述べようとし、何を読み手に伝えようとしているのか、そのためにどのような筋道で文章を書き進めているのかなどを念頭に置き、叙述を注意深くかつ丁寧に捉えることが求められる。

文学的な文章については、的確に把握できる人物や心情、情景の描写などが含まれるが、ここでは、叙述を基に的確に捉えられるものを対象にしている。そのため、特に心情の把握については、文章に明示されている叙述により、読み手が読み取るべきものを間違いなくかつ過不足なく捉えることが重要である。

○精査・解釈【①】

イ 作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈すること。

ものの見方、感じ方、考え方には、人生観や歴史や文化に対する価値観などが表れている。古典をはじめとした優れた作品や文章を読むことを通して、そこに表れている書き手や語り手などの、優れた認識や感性などを内容の解釈を深めることにつなげることが求められる。単に書き手や語り手などの思いや考えを理解することとは異なり、そのような思い

や考えがどのようなものの見方、感じ方、考え方によるものかを捉えることが大切である。

また内容を解釈するとは、叙述を基に捉えた、作品や文章の内容や構成、展開などを踏まえ、それらを読み手が知識や経験なども踏まえて意味づけながら解釈していくことである。登場人物の心情などについては文章中に明示されていないものもあるが、自分の知識や経験などと関係付けながら補い、登場人物の心情を解釈したり人物像をイメージしながら、自らの作品世界を構築する。このような場合にも捉えた作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を踏まえつつ、自らの解釈が客観的根拠を持ち、他者に説明できるような整合性を有するものであるかどうか十分検討することが必要である。

○精査・解釈【②】

ウ 文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価すること。

文章の構成については、何が書かれているかという内容ではなく、内容がどのように書かれているかという形式に関わっている。これらについて捉えた上で評価することを求めている。これらの評価する際には、文章が書かれた目的に照らし、その効果が適切なものであるか、自分の知識や経験に照らし合わせて優れた工夫といえるかなどについて検討することが必要である。語句の使い方や言い回しなどの特徴も含め、自分にとってどのような価値を持っているのかを判断し、説明できるようになることが求められる。

○精査・解釈【③】

エ 作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めること。

それぞれの作品や文章には、特有の背景があり、そこに目を向けることが求められている。また近代以降の小説の中には、古典の説話を基にしたものもあるため、他の作品などとの関係性を踏まえ、比較することにより解釈を深めていくことが大切である。

○考えの形成、共有

オ 作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもつこと。

「言語文化」において読む対象は、伝統や文化の厚みの中で形成された対象へのものの見方、感じ方、考え方を基底として編み出された、磨かれた言葉によって成立している。その対象を自分がどのような視点、観点、立場によって、どのような感性や感情をもって、どのような認識や解釈の仕方によって捉えるかという、対象に対する向かい方自体の深まり

を理解する。その上で、上代から現代に至る多種多様な価値ある作品や文章に触れ、それらに親しむことを通して自己を見つめ、自分の考えを持ち、未来に向けて自らのあるべき姿を展望することにつなげていく。

② ①に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。

ア 我が国の伝統や文化について書かれた解説や評論、随筆などを読み、我が国の言語文化について論述したり発表したりする活動。

イ 作品の内容や形式について、批評したり討論したりする活動。

ウ 異なる時代に成立した随筆や小説、物語などを読み比べ、それらを比較して論じたり批評したりする活動。

エ 和歌や俳句などを読み、書き換えたり外国語に訳したりすることなどを通して互いの解釈の違いについて話し合ったり、テーマを立ててまとめたりする活動。

オ 古典から受け継がれてきた詩歌や芸能の題材、内容、表現の技法などについて調べ、その成果を発表したり文章にまとめたりする活動。

こういった話し合いを行う活動では、物語の展開の仕方や、文章の形式、表現の効果などについて根拠を示しながら論じ合うことが求められる。ここでは、協調学習における知識構成型ジグソー法などを活用することができる。

さらに、取り上げる教材は、能や狂言、歌舞伎といった舞台芸能のほか、講談や落語といった話芸が想定される。特に、伝統芸能関係の資料はデジタル化されているものも多いため、ICT機器を利用し、発表活動等につなげることも効果的である。

(3) 内容の取扱い

① 内容の〔思考力、判断力、表現力等〕における授業時数については、次の事項に配慮するものとする。

ア 「A 書くこと」に関する指導については、5～10単位時間程度を配当するものとし、計画的に指導すること。

実際に文章を書いている時間だけではなく、題材を選んだり、参考となる文章を読んだりする時間も含めている。また、5～10単位時間と幅をもたせたのは、学校や生徒の実態に応じて弾力的な指導を可能とするためであり、各学校で適切な年間計画を策定することが求められる。

イ 「B 読むこと」の古典に関する指導に関する指導については、40～45単位時間程度を配当するものとし、計画的に指導するとともに、古典における古文

と漢文の割合は、一方に偏らないようにすること。その際、古典について解説した近代以降の文章などを活用するなどして、我が国の言語文化への理解を深めるよう指導を工夫すること。

古典を読んで考えたことについて書いたり話し合ったり、古典に関するテーマを立ててまとめたりする時間も含めている。また、40～45 単位時間と幅をもたせたのは、前項と同じ理由からである。

古典における古文と漢文との授業時数の割合に関しても、一方に偏らないようにすることとし、例えば、古文のみに多くの時間をかけたり、その取扱い方に深淺が生じたりすることがないよう配慮し、全体として両者をバランスよく指導する必要がある。

その際、古典について解説した近代以降の文章や、古典について書かれた随筆、古典の現代語訳などを活用するなどして、古典への抵抗感を軽減し、我が国の言語文化への理解を深めるよう指導を工夫することが求められる。古典の原文のみを重視することのないよう配慮が必要である。

ウ 「B 読むこと」の近代以降の文章に関する指導については、20 単位時間程度を配当するものとし、計画的に指導すること。その際、我が国の伝統と文化に関する近代以降の論理的な文章や古典に関連する近代以降の文学的な文章を活用するなどして、我が国の言語文化への理解を深めるよう指導を工夫すること。

言語文化を理解し、言語文化に親しむために、近代以降の文章を取り上げ指導する。実際に近代以降の文章を読んでいる時間だけではなく、文章を読んで考えたことについて書いたり話し合ったり、言語文化に関するテーマを立ててまとめたりする時間も含めている。

我が国の伝統と文化に関する近代以降の論理的な文章とは、主として、我が国の伝統や文化について書かれた解説や評論、随筆などを指している。また、古典に関連する近代以降の文学的な文章には、主として、古典を翻案したり素材にしたりした小説や物語、詩歌などを指している。いずれの文章も、科目の性格、目標、内容を踏まえ、我が国の言語文化への理解を深めるよう指導を工夫することが求められる。

② 内容の〔知識及び技能〕に関する指導については、次の事項に配慮するものとする。

ア ①のイの指導については、「現代の国語」の内容の〔知識及び技能〕の①のウの指導との関連を図り、計画的に指導すること。

イ ②のウの指導については、〔思考力、判断力、表現

力等〕の「B 読むこと」の指導に即して行うこと。

③ 内容の〔思考力、判断力、表現力等〕に関する指導については、次の事項に配慮するものとする。

ア 「A 書くこと」に関する指導については、中学校国語科の書写との関連を図り、効果的に文字を書く機会を設けること。

社会で通用する様々な書式のきまりや、相手や目的に応じて書くことの大切さを学習することを通じて、自らの生活や社会に生かすことができるよう、また、文字文化の担い手としての自覚をもつことができるよう、効果的に文字を書く機会を積極的に設けることが大切である。

イ 「B 読むこと」に関する指導については、文章を読み深めるため、音読、朗読、暗唱などを取り入れること。

音読、朗読、暗唱などとしているのは、演じることなども含めて、幅広く音声言語などによる表現活動を指導に取り入れることが可能であることを示すためである。なお、古典の音読、朗読、暗唱については、小学校及び中学校の学習との関連を踏まえる必要がある。

④ 教材については、次の事項に留意するものとする。

ア 内容の〔思考力、判断力、表現力等〕の「B 読むこと」の教材は、古典及び近代以降の文章とし、日本漢文、近代以降の文語文や漢詩文などを含めるとともに、我が国の言語文化への理解を深める学習に資するよう、我が国の伝統と文化や古典に関連する近代以降の文章を取り上げる。また、必要に応じて、伝承や伝統芸能などに関する音声や画像の資料を用いることができること。

イ 古典の教材については、表記を工夫し、注釈、傍注、解説、現代語訳などを適切に用い、特に漢文については訓点を付け、必要に応じて書き下し文を用いるなど理解しやすいようにすること。

ウ 内容の〔思考力、判断力、表現力等〕の「A 書くこと」及び「B 読むこと」のそれぞれ②に掲げる言語活動が十分行われるよう教材を選定すること。

3 「論理国語」

(1) 性格及び目標

グローバル化、情報化の進むこれからの社会では、考えの異なる他者との共通理解、課題を発見し解決をはかる創造性や合理性を重視した他者との協働が重要になる。また、示された情報の信頼性を見極めながら他者の主張を理解するとともに、自らの考えを論拠に基づいて構築する資質・能力の育成が必要である。

このことを踏まえ「論理国語」は、創造的・論理的

思考の側面の力を育成する科目として、実社会において必要な、論理的に書いたり批判的に読んだりする力の育成を重視している。

以下の目標では、国語科の目標を踏まえて実社会や他者との関わりが示されている。授業が教材の読解で終始することなく、学習する知識・技能、様々な論点、実社会で生きる我々に関わるものであることを伝えたい。

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けるようする。
- (2) 論理的、批判的に考える力を伸ばすとともに、創造的に考える力を養い、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。
- (3) 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。

(2) 内容

【知識及び技能】

○言葉の働き

① 言葉の特徴や使い方に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 言葉には、言葉そのものを認識したり説明したりすることを可能にする働きがあることを理解すること。

言葉によって我々は考えたり、その考えを述べたりするが、言葉そのものについて考え、述べることもやはり言葉によって可能となる。このような言葉そのものを認識したり説明したりする言葉の働きを理解することを求めている。

○語彙

イ 論証したり学術的な学習の基礎を学んだりするために必要な語句の量を増し、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすること。

論証のために必要な語句（例えば「ゆえに」「すなわち」「妥当」「矛盾」「仮説」「検証」など）や学術的な学習の基礎のための語句（「蓋然性」「パラダイム」など）を文章の中で使うことで、語感を磨き、語彙を豊かにすることを求めている。

○文や文章

ウ 文や文章の効果的な組立て方や接続の仕方について

理解を深めること。

書き手の意図を相手に誤解なく伝えるために必要な、文章の組み立て方（語句の選択や文の成分の並べ方等）、接続の仕方（例えば「第一に…、第二…」というナンバリングによる接続等）を理解することを求めている。

エ 文章の種類に基づく効果的な段落の構造や論の形式など、文章の構成や展開の仕方について理解を深めること。

文章の種類に応じた効果的な段落の構造（段落内部における文の組み立て方と段落相互の関係）の理解を深めたい。また様々な形式の推論がどのように構成されているのかなど、論の形式の特徴についても理解を深めることを求めている。

② 文章に含まれている情報の扱い方に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

○情報と情報との関係

ア 主張とその前提や反証など情報と情報との関係について理解を深めること。

ある主張が意識せずに前提としている「隠された前提」に気づき検討する力を身につけたい。また主張に対する反証とは、異なる論拠をもとに、主張とは別の結論を得る筋道である。こうした情報と情報との関係の理解を深めていくことが必要である。

○情報の整理

イ 情報を重要度や抽象度などによって階層化して整理する方法について理解を深め使うこと。

混在している情報を、重要度や抽象度、時系列などの観点から、段階を設定して階層化して整理することを学ぶ。情報の整理にはICTなどの機器や、情報の可視化に役立つ思考ツール（ベン図、イメージマップ等）を活用していきたい。

ウ 推論の仕方について理解を深め使うこと。

ある事柄から未知の事柄を推し量る推論には、演繹的な推論と、演繹的ではない推論（帰納、類推、仮説形成など）がある。実際にこれらの推論を用い筋道を立てて考えることで、推論の具体的な方法の理解を確実にすることが大切である。

③ 我が国の言語文化に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

○読書

ア 新たな考えの構築に資する読書の意義と効用について理解を深めること。

読書は時空を超えた著者との対話である。読書によって著者と対話し、その上で自分と向き合うことで新たな認識が生まれ、これまでにない価値の創出やパラダイムシフトが起こる。このような読書の意

義と効用について理解を深めたい。

【思考力、判断力、表現力等】

A 書くこと

① 書くことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

○題材の設定

ア 実社会や学術的な学習の基礎に関する事柄について、書き手の立場や論点などの様々な観点から情報を収集、整理して、目的や意図に応じた適切な題材を決めること。

ある立場に賛成か反対か、論じたい論点は何かなど、様々な観点から情報を集めた上で、目的に応じた題材を設定することを求めている。情報を整理する際、ICTの機器の利用、思考ツール（ベン図、イメージマップ等）の活用が効果的である。

○情報の収集、内容の検討

イ 情報の妥当性や信頼性を吟味しながら、自分の立場や論点を明確にして、主張を支える適切な根拠をそろえること。

集めた情報が正しく根拠として適切か、また情報の発信源を見て信頼できるものかを吟味しながら、自らの主張を導くことができる適切な根拠をそろえることを求めている。

○構成の検討

ウ 立場の異なる読み手を説得するために、批判的に読まれることを想定して、効果的な文章の構成や論理の展開を工夫すること。

様々な立場の読み手を説得するためには、根拠から主張・結論への論理の筋道を整え、またその筋道が明確に見えるような構成を工夫することが求められている。

○考えの形成、記述

エ 多面的・多角的な視点から自分の考えを見直したり、根拠や論拠の吟味を重ねたりして、主張を明確にすること。

オ 個々の文の表現の仕方や段落の構造を吟味するなど、文章全体の論理の明晰さを確かめ、自分の主張が的確に伝わる文章になるよう工夫すること。

エでは自らの主張内容の吟味・明確化が求められている。様々な立場から考えることで自己の考えを相対化して考え、論拠と主張の関係を見直す中で、自らの主張が更に明確になる。

オでは表現の形式を工夫することが求められている。個々の文章の表現、個々の段落の関係を吟味して、自らの主張が伝わるように論理の筋道を適切に整えていくことが必要である。

○推敲、共有

カ 文章の構成や展開、表現の仕方などについて、自分の主張が的確に伝わるように書かれているかなどを吟味して、文章全体を整えたり、読み手からの助言などを踏まえて、自分の文章の特長や課題を捉え直ししたりすること。

自らが記述した論の流れが的確なものであるかを、様々な読み手の立場に立って客観的に検討し整え直すことが求められている。ここでは結論の内容の正しさより、論証の的確さを確認することが求められる。また、自己評価や相互評価の活動を通して、自分の文章のよさや課題を発見し、表現力の向上に役立てたい。

② ①に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。

ア 特定の資料について、様々な観点から概要などをまとめる活動。

イ 設定した題材について、分析した内容を報告文などにまとめたり、仮説を立てて考察した内容を意見文などにまとめたりする活動。

ウ 社会的な話題について書かれた論説文やその関連資料を参考にして、自分の考えを短い論文にまとめ、批評し合う活動。

エ 設定した題材について多様な資料を集め、調べたことを整理して、様々な観点から自分の意見や考えを論述する活動。

資料をまとめる活動、報告文・意見文を論述する活動、自分の考えを論文にして批評し合う活動、資料を集めて整理し自分の考えを論述する活動が示されている。一つの資料を様々な観点から考える活動では、協同学習の手法が生かせる。論文にまとめる活動では、要旨・目的・方法・結果・考察・結論という論証の手続きを指導したい。また、適切な情報の入手の仕方、参考文献の引用の仕方も指導する必要がある。批評し合う活動も示されている。評価基準の示されたルーブリックをもとに相互評価を行い、自らの論述のよさや課題に気づかせ、表現力の向上につなげることが大切である。またお互いに議論する中で、新たな疑問・課題が生じることがある。題材について自らの主張・結論を形成するだけでなく、そこから新たな疑問・課題に気づけるように導くことが望ましい。

B 読むこと

① 読むことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

○構造と内容の把握

ア 文章の種類を踏まえて、内容や構成、論理の展開などを的確に捉え、論点を明確にししながら要旨を把

握すること。

イ 文章の種類を踏まえて、資料との関係を把握し、内容や構成を的確に捉えること。

アでは、論点を明確にし、要旨を把握することが求められている。そのためには根拠から主張へと至る論理の筋道を的確に捉えることが必要である。主要な論点と、具体例、説明、補足とを判別し、その関係を押さえた上で、主要な論点を読み取りたい。

イでは、資料との関係を把握して内容・構成を捉えることが求められている。図やデータが書き手の主張をどのように支えているかを読み取り、資料を含めた文章の内容・構成を書き手の意図を踏まえて的確に捉えることが求められている。

○精査・解釈【①】

ウ 主張を支える根拠や結論を導く論拠を批判的に検討し、文章や資料の妥当性や信頼性を吟味して内容を解釈すること。

根拠から主張へと至る筋道の適切さを吟味することで、書き手の思考過程を体験でき、根拠・論拠の働きを検討できる。論証に用いられた根拠や例示の適切さ、出典の妥当性等を吟味して文章全体を批判的に検討しながら内容を解釈したい。

○精査・解釈【②】

エ 文章の構成や論理の展開、表現の仕方について、書き手の意図との関係において多面的・多角的な視点から評価すること。

書き手が何を伝えようとしているのかを考えて、文章構成や論理展開、表現の仕方を評価することが求められている。その際、資料の示し方は適切か、明確に伝わる構成や展開となっているかなどの観点から評価する。

○精査・解釈【③】

オ 関連する文章や資料を基に、書き手の立場や目的を考えながら、内容の解釈を深めること。

関連する文章や資料とは、書き手の主張に関連する他の書き手の文章や、書き手の提示した資料以外の関連する資料である。与えられた情報をうのみにせず、様々な情報をもとに批判的に検討して、内容の解釈を深めることが求められている。

○考えの形成、共有【①】

カ 人間、社会、自然などについて、文章の内容や解釈を多様な論点や異なる価値観と結び付けて、新たな観点から自分の考えを深めること。

テーマに関して自分の考えを持った上で、関連する様々な文章や資料を読み取り、多様な立場や主張と自分の考えを結びつけて再検討することで、自分の考えを新たな観点で見つめて深めていくことが求

められている。

○考えの形成、共有【②】

キ 設定した題材に関連する複数の文章や資料を基に、必要な情報を関係付けて自分の考えを広げたり深めたりすること。

設定したテーマについて、主体的に学び課題を自ら見出して探究していく学習が求められている。文章を読んだ後、学校や地域の図書館、インターネットでの調査、現地に出かけての取材などを通して考察を深める。自分の思想を新たな視点で捉え直して、より深め発展させていくことが大切である。

② ①に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。

ア 論理的な文章や実用的な文章を読み、その内容や形式について、批評したり討論したりする活動。

イ 社会的な話題について書かれた論説文やその関連資料を読み、それらの内容を基に、自分の考えを論述したり討論したりする活動。

ウ 学術的な学習の基礎に関する事柄について書かれた短い論文を読み、自分の考えを論述したり発表したりする活動。

エ 同じ事柄について異なる論点をもつ複数の文章を読み比べ、それらを比較して論じたり批評したりする活動。

オ 関心をもった事柄について様々な資料を調べ、その成果を発表したり報告書や短い論文などにまとめたりする活動。

読んだ文章の内容や形式を論じる活動、読んだ内容をもとに論述・討論する活動、複数の文章を読み比べて批評する活動、興味をもった事柄を探究していく活動が示されている。読んだ文章について考えを論述する授業では、関連する資料を複数の視点から考えさせることが大切である。発表では文章を書く他、ポスターセッションなどの方法も考えられる。複数の文章を読み比べる授業では、協調学習の手法が生かせる。一つの意見だけをうのみにせず、様々な意見を重ね合わせることで新たな知見が生まれることを経験させたい。関心をもった事柄を探究していく授業では、図書館やインターネットや現地での調査等で分かったことを分析して考察する学習を取り入れることが大切である。また主張の形成には論理的な推論を働かせるよう指導することが必要である。テーマの問題を教材の中だけではなく、自分の生きる世界と関わらせて捉え、探究していく姿勢を身につかせるようにしたい。

(3) 内容の取扱い

① 内容の〔思考力、判断力、表現力等〕における授

業時数については、次の事項に配慮するものとする。
ア 「A 書くこと」に関する指導については、50～60 単位時間程度を配当するものとし、計画的に指導すること。

実際に文章を書いている時間だけではなく、題材選びや参考となる文章や資料の読解、情報の整理の時間も含めている。また 50～60 単位時間と幅があるのは、生徒の実態に応じた弾力的な指導を可能とするためである。各学校で適切な年間計画を策定することが必要である。

イ 「B 読むこと」に関する指導については、80～90 単位時間程度を配当するものとし、計画的に指導すること。

実際に文章を読んでいる時間だけではなく、読んで考えたことを話したり聞いたり書いたりする時間も含めている。前項と同様の理由から時間配分には幅を持たせている。

② 内容の〔思考力、判断力、表現力等〕に関する指導については、次の事項に配慮するものとする。

ア 「B 読むこと」に関する指導については、必要に応じて、近代以降の文章の変遷を扱うこと。

近代以降我が国の論理的な文章はどのような問題意識のもと、どのような文章や文体で書かれてきたのか。その変遷を知ることは、現代の文章を十全に理解することにつながる。また、それを契機にして発展的な読書につながるように指導することが大切である。

③ 教材については、次の事項に留意するものとする。

ア 内容の〔思考力、判断力、表現力等〕の「B 読むこと」の教材は、近代以降の論理的な文章及び現代の社会生活に必要とされる実用的な文章とすること。また、必要に応じて、翻訳の文章や古典における論理的な文章などを用いることができること。

近代以降の論理的な文章とは、明治時代以降の評論文や学術論文等を指す。実用的な文章とは報道の文章や、説明書、企画書、法令文、電子メール等の現代の社会生活に必要とされるものである。さらに必要に応じて、翻訳の文章を用いることができる。これは、翻訳の文章が我が国の学術発展へ寄与してきた経緯を考えると、現代の論理的な文章の読解に翻訳の文章が重要な要素となることや、グローバル化する世界の状況を踏まえてのことである。また古典における論理的な文章（歌論、芸術論等）を用いることができる。古典の論理と現代の論理とを比較・対照して、論理の在り方の理解を深めたい。

イ 内容の〔思考力、判断力、表現力等〕の「A 書くこと」及び「B 読むこと」のそれぞれの②に掲げ

る言語活動が十分行われるよう教材を選定すること。

4 「文学国語」

(1) 性格及び目標

国語の中でも特に文学は、長い歴史の中で形成されてきた文化の基盤をなし、文化そのものである。人々の心の機微を描き、日常世界を見つめ直す契機として存在し、また文化の継承と創造にこれからも欠くことができないものである。

このことを踏まえ「文学国語」は文学的文章を通して主に思考力、判断力、表現力等の感性や情緒の側面の力を育成する科目として存在する。

以下の目標では国語科の目標を踏まえて言葉を通して他者との関わりについて示している。生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付け、深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、創造的に考える力を養い、他者との関わりの中で、言葉を通して伝え合う力の育成を目指している。

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の言語文化に対する理解を深めることができるようにする。
- (2) 深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばすとともに、創造的に考える力を養い、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。
- (3) 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。

(2) 内容

〔知識及び技能〕

○言葉の働き

① 言葉の特徴や使い方に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 言葉には、想像や心情を豊かにする働きがあることを理解すること。

言葉には、読み手（聞き手）が直接的に経験していないことや経験できないことを、表現の持つ言外の情報を頼りに想像させる働きがある。ここではまた、言葉が読み手（聞き手）の想像を喚起することで心情を豊かにする働きがあることを理解すること

を求めている。

○語彙

イ 情景の豊かさや心情の機微を表す語句の量を増し、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすること。

情景の豊かさを表す語句（例えば「爛漫」「かぐわしい」「山が笑う」など）や心情の機微を表す語句（例えば「慚愧」「誇らか」「肩をいからす」など）を広く理解し語彙量を増やしていくことを求めている。また何気ない語句の組み合わせが情景や心情の機微を巧みに表すことがあるため、読んだり書いたりすることを通して語感を磨くことを求めている。

○文や文章

ウ 文学的な文章やそれに関する文章の種類や特徴などについて理解を深めること。

文学的な文章（例えば散文としての小説、随筆、日記などや韻文としての詩、俳句、和歌など）やそれに関する文章（例えば文学評論など）の種類やそれらの構成や表現の特徴を多角的に理解し、読みの観点を獲得することを求めている。

○表現の技法

エ 文学的な文章における文体の特徴や修辞などの表現の技法について、体系的に理解し使うこと。

文体の特徴（例えば和文体や和漢混交文体などや常体・敬体などの様式に基づく分類など）や比喻、擬音語、押韻などの表現の技法としての修辞を、書かれた時代や場面に即して整理し、実際の場面で使用していくことを求めている。

② 我が国の言語文化に関する次の事項を身に付けることができるように指導する。

○伝統的な言語文化、言葉の由来や変化、多様性

ア 文学的な文章を読むことを通して、我が国の言語文化の特質について理解を深めること。

個々の作品や文章に表れた書き手の個性と理解されるものが、巨視的に捉えると作品の生まれた時代の特徴、さらには現代につながる我が国の文化全体の独自性と理解できる。グローバル化する社会において、先人から受け継いできた言語文化や背後にある精神性を生徒一人一人が自覚し、尊重する態度を育むことを求めている。

イ 人間、社会、自然などに対するものの見方、感じ方、考え方を豊かにする読書の意義と効用について理解を深めること。

様々な言葉によって豊かな情景や心情が表現された文学的な文章を読むことで、そこから想起される世界や登場人物の喜怒哀楽を迫体験することができる。読者の年齢や個別の経験を踏まえた読書が新た

なものの見方、感じ方、考え方の獲得につながることもあるため、時機を捉えて、生涯にわたって読書に親しむ態度を育成することを求めている。

〔思考力、判断力、表現力等〕

A 書くこと

① 書くことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

○題材の設定、情報の収集、内容の検討

ア 文学的な文章を書くために、選んだ題材に応じて情報を収集、整理して、表現したいことを明確にすること。

現実的なものから想像的なものまで広く題材を選び、形式と内容の両側面から情報を収集整理し、創作の幅を広げることがを求めている。収集した情報を整理する過程や設定した題材の妥当性や独自性を検討する際は他者の意見を取り入れ、多角的に考察し、情報機器等を用いて精査する機会を設けることが大切である。

○構成の検討

イ 読み手の関心が得られるよう、文章の構成や展開を工夫すること。

文学的な文章を創作する際、読み手の関心を引くためには、読み手の読み方を想定しながら構成や展開を工夫することが必要である。例えば、小説においては登場人物の関係や心情変化、伏線など、短歌や俳句などの韻文においては配列の工夫などが考えられる。

○考えの形成、記述

ウ 文体の特徴や修辞の働きなどを考慮して、読み手を引き付ける独創的な文章になるよう工夫すること。

構造や表記、様式などによる文体の特徴と比喻や押韻などの修辞を工夫することを求めている。特に長い時を経て練り上げられてきた修辞を文学的な文章に取り入れることで作品世界が重層化し、豊かな表現につながる。書き手が言葉の持つ意味を深く理解し、それに基づく言葉の取捨選択を踏まえて書いた文学的な文章は読み手を引き付ける独創性を生み出す。単なる言葉の羅列にならないように、自らが伝えたいことや感じてもらいたいことと言葉とを的確に結び付けて書くことが大切である。

○推敲、共有

エ 文章の構成や展開、表現の仕方などについて、伝えたいことや感じてもらいたいことが伝わるように書かれているかなどを吟味して、文章全体を整えたり、読み手からの助言などを踏まえて、自分の文章の特長や課題を捉え直したりすること。

読み手が書き手の意図したことをどのように受け

取ったかを自己評価や相互評価を通して、生徒自身が客観的に吟味し、捉え直すことを求めている。生徒自身が創作した作品を客観視し、自分の文章の特長や課題を捉え直すことで、次の創作を行う際により効果的な表現の工夫が可能となる。

② ①に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通じて指導するものとする。

ア 自由に発想したり評論を参考にしたりして、小説や詩歌などを創作し、批評し合う活動。

イ 登場人物の心情や情景の描写を、文体や表現の技法等に注意して書き換え、その際に工夫したことなどを話し合ったり、文章にまとめたりする活動。

ウ 古典を題材として小説を書くなど、翻案作品を創作する活動。

エ グループで同じ題材を書き継いで一つの作品をつくるなど、共同で作品制作に取り組む活動。

小説や詩歌などを創作し批評し合う活動、心情や背景の描写を文体等に注意して書き換え、その工夫を話し合う活動、翻案作品を創作する活動、共同で作品制作に取り組む活動が示されている。

小説や詩歌などを創作し批評し合う活動では、豊かな発想から生まれる独自性を大切に、作品の要点を見極めながら批評することが大切である。また、書き手は創作の段階から読み手の批評を意識しながら内容を検討することが求められている。心情・背景描写を書き換え、その工夫をまとめたり話し合ったりする活動では、もとの文章と比較・対照する過程を通して、一つ一つの言葉を深く理解し、新たな意味を捉え直す契機としていきたい。翻案作品を創作する活動では、元の作品への深い理解を基底とした新たな視点や問題意識が求められている。翻案作品と元の作品との比較・分析を通して、生徒が言語文化への理解を深めるように指導していくことが大切である。共同で作品制作に取り組む活動では様々な発想をもつ他者と同じ時間や空間を共有することで生まれる意外性や即興性を大切にしていきたい。

B 読むこと

① 読むことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

○構造と内容の把握

ア 文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開、描写の仕方などを的確に捉えること。

散文や韻文などの文学的な文章の種類を踏まえて内容や構成、展開、描写等の特徴を的確に捉えながら読むことが求められている。小説の伏線や視点人物の視点を通して描かれる心情や情景の理解が作品を深く理解する契機となることに気づかせたい。

○精査・解釈【①】

イ 語り手の視点や場面の設定の仕方、表現の特色について評価することを通して、内容を解釈すること。

語り手の視点が登場人物の一人なのか、客観的な外部の者なのか、語り手の視点を吟味することは多角的なものの見方の獲得と小説を客観的に読むことにつながる。場面の設定は文学的文章における状況や舞台の設定のみならず、登場人物が五感で感じている世界を理解することであり、その理解を契機に生徒は作品世界に深く入り込むことができる。また、特徴的な表現に注目することが作品世界を深く捉える契機になることを、生徒自身が気付けるようにしていくことが求められている。

ウ 他の作品と比較するなどして、文体の特徴や効果について考察すること。

同じ作家の複数の作品や、書かれた時代を共通にする異なる作家の作品、翻案小説と原典などとの比較を通して、文体の特徴や効果を明らかにし、個々の作品や作家の特徴を深く理解することができる。作家論や作品論などを踏まえ、生徒の好きな作家や作品に関して生徒自身の作家論・作品論を考えさせることも考えられる。

エ 文章の構成や展開、表現の仕方を踏まえ、解釈の多様性について考察すること。

解釈は一定の客観性を担保としながらも、読み手の知識や経験、年齢など様々な要素によって根拠となるものや意味付けが異なるため多様性を持つ。はじめから作品や文章の解釈が一つしかないとは決め付けず、生徒の解釈に耳を傾けて、解釈の根拠を確かめながら作品の理解をより深いものに育てていく必要がある。また、解釈の多様性を共有することを前提に文学的文章を通じた相互理解が可能になり、人生を豊かにするための大切な思いや考えを学ぶことにつながる。

○精査・解釈【②】

オ 作品に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉えるとともに、作品が成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、作品の解釈を深めること。

書き手の認識や価値観は作品が成立した背景や他作品などとの関係によって成立しており、作品の独創はそれまでの文化的な教養や慣習に関係している。そのため深い作品の解釈には、国語のみならず、歴史や芸術、数学や科学など教科横断的な幅広い知識や教養が求められる。

○考えの形成、共有【①】

カ 作品の内容や解釈を踏まえ、人間、社会、自然などに対するものの見方、感じ方、考え方を深めるこ

と。

文学的な文章の解釈を基に、自己の知識や経験が相対化されることで、ものの見方、感じ方、考え方を深めることが求められている。作品への共感や疑問は自己を相対化する契機となり得るため大切にし、自己の知識や経験が増えることで自分のものの見方などがより広がり、深まる可能性があることにも気づかせたい。

○考えの形成、共有【②】

キ 設定した題材に関連する複数の作品などを基に、自分のものの見方、感じ方、考え方を深めること。

文学的な文章の解釈を踏まえ、設定した題材に係る複数の作品の比較・考察を経て、生徒自身のものの見方などを深めることを求めている。受動的な学習では自分の考えや解釈は生まれず、深めることもできない。題材の設定については生徒の自主性を尊重し、各自の問題意識や興味関心を最大限引き出して行うことが望ましい。そして主体的な姿勢から生み出された各自のものの見方などを、他者と共有してお互いを認め合う姿勢を養うことも大切である。

② ①に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通じて指導するものとする。

ア 作品の内容や形式について、書評を書いたり、自分の解釈や見解を基に議論したりする活動。

イ 作品の内容や形式に対する評価について、評論や解説を参考にしながら、論述したり討論したりする活動。

ウ 小説を、脚本や絵本などの他の形式の作品に書き換える活動。

エ 演劇や映画の作品と基になった作品とを比較して、批評文や紹介文などをまとめる活動。

オ テーマを立てて詩文を集め、アンソロジーを作成して発表し合い、互いに批評する活動。

カ 作品に関連のある事柄について様々な資料を調べ、その成果を発表したり短い論文などにまとめたりする活動。

作品の内容や形式について書評・議論する活動、作品の評価について論述・討論する活動、小説を他の形式に書き換える活動、演劇や映画などの作品とその原作とを比較し、批評文や紹介文にまとめる活動、テーマを基にアンソロジーを作成し、成果を発表・批評する活動、作品関連の資料を調べ、成果を発表したりする活動が示されている。

書評をする活動では過去の書評や実際に新聞に掲載されている書評なども比較し、自分の解釈や見解が論拠に基づいて行われているか、事実と考えを

明確に分けて行っているか注意させたい。作品の評価について論述・討論する活動では協調学習の手法が活かせる。文学に関する研究論文や文庫本の解説、作品発表当時の書評など、複数の評価を読み比べることで自己の読みの相対化につなげたい。他の形式に書き換える活動では字数の制限や対象となる読手の制限など、何らかの制約が発生するため、その制約を超えようと生徒は原典の作品と向き合い、より深い理解が要求される。また創作を通して言語文化の裾野が広がっていくことにも注目させたい。原作と創作された作品を比較し、批評したりする活動については、原作の他に映画やドラマ、パロディ作品、スピンオフ作品など、多様な形式やメディアで二次創作が展開される時代を反映させ、生徒の興味関心に基づいた授業内容を検討したい。テーマを基にアンソロジーを作成し、発表・批評する活動ではアンソロジー作成の活動を通して、選択したテーマの深化と言葉の吟味をさせたい。作品関連の資料を調べ、成果を発表したりする活動では図書館やインターネットを積極的に活用することや、調べた成果をまとめ、ポスターセッションなどの方法で発表する方法も考えられる。

(3) 内容の取扱い

① 内容の〔思考力、判断力、表現力等〕における授業時数については、次の事項に配慮するものとする。

ア 「A書くこと」に関する指導には、30～40単位時間程度を配当するものとし、計画的に指導すること。

実際に文章を書いている時間だけではなく、題材を選びや参考となる文章や資料の読解、情報整理の時間も含めている。また30～40単位時間と幅があるのは、学校や生徒の実態に応じて弾力的な指導を可能とするためである。各学校で適切な年間計画を策定することが必要である。

イ 「B読むこと」に関する指導については、100～110単位時間程度を配当するものとし、計画的に指導すること。

実際に文章を読んでいる時間だけではなく、読んで形成された考えについて話したり聞いたり書いたりする時間も含めている。また100～110単位時間と幅があるのは、学校や生徒の実態に応じて弾力的な指導を可能とするためである。

② 内容の〔思考力、判断力、表現力等〕に関する指導については、次の事項に配慮するものとする。

ア 「B読むこと」に関する指導については、必要に応じて、文学の変遷を扱うこと。

文学の変遷の扱いが単なる作品名と作者名を丸暗記することにならないように、内容や表現の作者・

時代毎の特色や連続性・共通性に着目し、生徒の発達段階や科目の趣旨に留意しながら取り上げることが大切だ。

- ③ 教材については、次の事項に留意するものとする。
ア 内容の〔思考力、判断力、表現力等〕の「B読むこと」の教材は、近代以降の文学的な文章とすること。また、必要に応じて、翻訳の文章、古典における文学的な文章、近代以降の文語文、演劇や映画の作品及び文学などについての評論文などを用いることができること。

近代以降の文学的な文章とは、明治時代以降に書かれた、小説、詩歌、随筆などの文学的な文章を指す。さらに必要に応じた翻訳文章の使用は、西欧諸国の文学や思想が我が国に大きな影響を与えたことを鑑み、これからのグローバル化の視点も踏まえてのことだ。古典における文学的な文章とは、古文では和歌や随筆など、漢文では史伝や近代詩などである。文学などについての評論文は作品論や作家論を含む。これらの文章に触れ、情景の豊かさや心情の機微を普遍的に捉え直す契機としたい。演劇や映画などの映像作品の視聴に関しては、あくまでも言語の教育を目指す国語科の性格を踏まえる範囲で行うことに留意したい。

- イ 内容の〔思考力、判断力、表現力等〕の「A書くこと」及び「B読むこと」のそれぞれの②に掲げる言語活動が十分に行われるよう教材を選定すること。

5 「国語表現」

(1) 性格及び目標

グローバル化、情報化が進展し、価値観が多様化している中、人々の生活環境、言語環境が急速に変化し、社会生活も多様化している。これからの社会を生きていくためには、言語により理解し、思考し、表現する能力を確実に身に付ける必要がある。とりわけ自らの思いや考えを表現し、他者とのコミュニケーションを図る資質・能力を高めることが必要不可欠である。

このことを踏まえ「国語表現」では、他者とのコミュニケーションの側面の力を育成して、実社会で必要な他者との多様な関わりの中で伝え合う資質・能力の育成を重視している。

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語での確に理解し効果的に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けるようにする。
- (2) 論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、実社会における他者との多様な関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。
- (3) 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。

以下の目標では、国語科の目標を踏まえて実社会や他者との関わりが示されている。授業では、言語活動を行うこと自体が目的で終わることがないように、学習する内容が実社会でどのように生かされるのかを意識させたい。

(2) 内容

〔知識及び技能〕

○言葉の働き

- ① 言葉の特徴や使い方に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 言葉には、自己と他者の相互理解を深める働きがあることを理解すること。

言葉には、人間関係を築く際に相互の立場や考えを尊重しながら、言葉を通して適切に表現したり理解したりして、相互理解を深める働きがある。相互理解を深める上では、言葉の多義性（例えば、明示的な意味と暗示的な意味を持つこと）を理解することが重要であり、このような言葉の働きに気づき、実社会で用いられている言葉を見つめ直すことを求めている。

○話し言葉と書き言葉、言葉遣い

イ 話し言葉と書き言葉の特徴や役割、表現の特色について理解を深め、伝え合う目的や場面、相手、手段に応じた適切な表現や言葉遣いを理解し、使い分けること。

話し言葉と書き言葉の特徴や役割、表現の特色を一般的な知識として理解し、使うだけではなく、相手や手段に応じた個々の交流の場での適切な表現や言葉遣いを理解し、使い分けることを求めている。また、実社会では、話し言葉と書き言葉の接近と融合が進んでおり、SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）などの表現媒体の特徴にも対応し、言葉を使い分けることも重要である。

○語彙

ウ 自分の思いや考えを多彩に表現するために必要な語句の量を増し、話や文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすること。

自分の思いや考えを多彩に表現するために必要な語句（例えば、悲しい思いの表現には、「悲しい」「哀れむ」「悲嘆」「胸がふさがる」「悲しみに暮れる」など）を増やすことが大切である。そして、相手との関係、相手と関わりを持つ状況や場面、目的や手段の違いなどに応じて、それらの語句を話や文章の中で使用していくことを通して、語感を磨き、語彙を豊かにすることを求めている。

○文や文章

エ 実用的な文章などの種類や特徴、構成や展開の仕方などについて理解を深めること。

実用的な文章（例えば、案内、紹介、依頼などの文章や手紙のほか、報告書、説明書、企画書、契約書などの実務的な文章、法律の条文、宣伝の文章など）は、一定の様式に従い、必要な情報を漏れなく書き、相手や目的に応じて伝えるべき事柄を取捨選択したり再構成したりして、文章構成にも留意して簡潔に分かりやすく書くことが重要である。実用的な文章への理解を深め、適切に使えるようにすることを求めている。

○表現の技法

オ 省略や反復などの表現の技法について理解を深め使うこと。

省略、反復、列叙などの表現の技法についての種類や効果を知識として理解するだけでなく、目的に応じてこれらの技法を適切に使えることを求めている。

② 我が国の言語文化に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 自分の思いや考えを伝える際の言語表現を豊かにする読書の意義と効用について理解を深めること。

読書は、多様な考え方や生き方を追体験したり対象化したりすることで、自己の認識を広げ深めるとともに、多様な表現方法に触れて、自身の言語表現を豊かにする。読書を通して拡充した言語表現を使って自分の思いや考えを伝えることで、他者との関わりがさらに深まっていくことを実感するように指導することを求めている。

〔思考力、判断力、表現力等〕

A 話すこと・聞くこと

① 話すこと・聞くことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

○話題の設定、情報の収集、内容の検討

ア 目的や場に応じて、実社会の問題や自分に関わる事柄の中から話題を決め、他者との多様な交流を想定しながら情報を収集、整理して、伝え合う内容を検討すること。

話すことが行われる個々の様々な状況を考え、実社会の問題や自分に関わる事柄の中から話題を決め、相互理解を図るために、情報を収集、整理しながら伝え合う内容を検討することを求めている。また、情報を扱う際には、ICTなど機器や紙の利用、情報の可視化に役立つ資材（例えば、ベン図、イメージマップなど）の活用も効果的である。

○構成の検討、考えの形成（話すこと）

イ 自分の主張の合理性が伝わるよう、適切な根拠を効果的に用いるとともに、相手の反論を想定して論理の展開を考えるなど、話の構成や展開を工夫すること。

ウ 自分の思いや考えが伝わるよう、具体例を効果的に配置するなど、話の構成や展開を工夫すること。

イでは、自らの主張の合理性を伝えるための効果的な根拠の用い方、相手を意識した論理展開や話の構成と展開を求めている。常に相手を意識して、相手の関心や理解に沿って適切に展開を工夫していくことが重要である。

ウでは、自らの伝達すべき内容がよく伝わるように、具体例を効果的に配置するなど、話の構成や展開次第で相手の関心を引いたり、話の趣旨を補強したりすることができることを理解し、工夫することが重要である。

○表現、共有（話すこと）

エ 相手の反応に応じて言葉を選んだり、場の状況に応じて資料や機器を効果的に用いたりするなど、相手の同意や共感が得られるように表現を工夫すること。

相手の同意や共感を得るために、相手の反応に応じて言葉を選んだり、場の状況に応じて資料やICT機器を効果的に用いたりするなどの表現の工夫を求めている。また、課題を明確にしたり、解決方法を具体的に提案したりするなど、相手とともに考えていこうとする姿勢を持ち続けることが重要である。

○構造と内容の把握、精査・解釈、考えの形成、共有（聞くこと）

オ 論点を明確にして自分の考えと比較しながら聞き、話の内容や構成、論理の展開、表現の仕方を評価するとともに、聞き取った情報を吟味して自分の考えを広げたり深めたりすること。

カ 視点を明確にして聞きながら、話の内容に対する

共感を伝えたり、相手の思いや考えを引き出ししたりする工夫をして、自分の思いや考えを広げたり深めたりすること。

議論における論点についての自分の考えとの共通点や相違点を整理しながら聞き、主張を伝える手法を価値づけながら、その情報を慎重に吟味することが必要である。話を聞く際には、共感的に聞くだけでなく、批判的に聞く姿勢も求められる。その中で自己対話を重ね、自分の考えを広げたり、深めたりしていくことが重要である。

視点を明確にして相手に「訊く」(尋ねる)ことで、「聞く」や「聴く」にとどまらず、問題意識をもって相手の話を引き出すようにすることや、相手の話に相槌を打つなどして同意や共感を示したりするなど、話を発展させるための工夫を求めている。それにより他者の考え方に触れられ、新しい視点を獲得したり、自分の生き方を見つめ直したりして、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることにつなげることが大切である。

○話し合いの進め方の検討、考えの形成、共有（話し合うこと）

キ 互いの主張や論拠を吟味したり、話し合いの進行や展開を助けたりするために発言を工夫するなど、考えを広げたり深めたりしながら、話し合いの仕方や結論の出し方を工夫すること。

相互に主張の根拠や論理の妥当性を精査したり、話し合いの着地点を意識しながら進行を配慮した発言をしたりするなど、話し合いの中での工夫を求めている。実社会では、結論が一つに辿り着かないこともある。相互理解を促す話し合いができる状況を作り出せることが重要である。

② ①に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。

ア 聴衆に対してスピーチをしたり、面接の場で自分のことを伝えたり、それらを聞いて批評したりする活動。

イ 他者に連絡したり、紹介や依頼などをするために話をしたり、それらを聞いて批評したりする活動。

ウ 異なる世代の人や初対面の人にインタビューをしたり、報道や記録の映像などを見たり聞いたりしたことをまとめて、発表する活動。

エ 話し合いの目的に応じて結論を得たり、多様な考えを引き出ししたりするための議論や討論を行い、その記録を基に話し合いの仕方や結論の出し方について批評する活動。

オ 設定した題材について調べたことを、図表や画像なども用いながら発表資料にまとめ、聴衆に対して

説明する活動。

スピーチ活動、模擬面接による面接官の立場から自分の振り返りを行う活動、連絡・紹介・依頼などを電話応対や対面で伝える活動などが示されている。どれも評価規準が明確なルーブリックを用いて相互評価をすることがより効果的である。発表活動では、様々な方へのインタビューや新聞、テレビ、インターネットなどの媒体を通じての報道や記録、映像などからの情報を適切にまとめて伝える活動が示されている。発表のために情報収集し、まとめる活動には協調学習の手法を生かすことが可能である。その他に、議論や討論、その記録に基づいた話し合いの仕方についての批評活動や自ら題材について調べたことについてプレゼンテーションすることも示されている。これらの活動では、資料作成だけが目的とならないように、指導することが重要である。

B 書くこと

① 書くことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

○題材の設定、情報の収集、内容の検討

ア 目的や意図に応じて、実社会の問題や自分に関わる事柄の中から適切な題材を決め、情報の組合せなどを工夫して、伝えたいことを明確にすること。

世界の政治・経済上の出来事や、科学、文化、芸術、スポーツについての知識や話題、身の回りの様々な諸問題、自分に関わる事柄の中から、考察する題材を決め、集めた情報を吟味し、活用していくことを求めている。情報を扱う際には、何のために読んでもらうのかという目的意識と、誰に読んでもらうのかという相手意識が重要であり、それにより情報の整理や選択が異なってくるので注意させたい。また、ICTなど機器や紙の利用、情報の可視化に役立つ資材（例えば、ペン図、イメージマップなど）の活用も効果的である。

○構成の検討、考えの形成

イ 読み手の同意が得られるよう、適切な根拠を効果的に用いるとともに、反論などを想定して論理の展開を考えるなど、文章の構成や展開を工夫すること。

ウ 読み手の共感が得られるよう、適切な具体例を効果的に配置するなど、文章の構成や展開を工夫すること。

イでは、自らの主張の妥当性・合理性を示すための効果的な根拠の用い方、論理の構成と展開が求められている。同じ題材についても、多様な考え方や見解があることに目を向け、それぞれの長短を考えていくなどの工夫を積み重ねていくことで、多面的に物事を捉えていく思考を育てることも大切である。

ウでは、論理の展開だけでなく、読み手を引き付ける具体例を挙げたり、具体例を効果的に配置したりするなどの工夫が必要である。また、読み手の共感を得るためには、読み手とともに様々な観点から検討を重ねて結論に導くなどの工夫が考えられる。一つの型にこだわらず、複数の書き方から目的や相手に応じて適切に選択できるように指導したい。

○考えの形成、記述

エ 自分の考えを明確にし、根拠となる情報を基に的確に説明するなど、表現の仕方を工夫すること。

オ 自分の思いや考えを明確にし、事象を的確に描写したり説明したりするなど、表現の仕方を工夫すること。

エでは、漠然とした状態にある自分の考えを明確にし、的確な言葉で端的に述べるとともに、自分の考えの根拠となる情報を正確に分かりやすく説明することを求めている。その際、自分の感動や思いを的確に説明するために、目的や相手に応じて、「文体」の工夫や文章の形式の選択などを適切に行うことが大切である。

オでは、全体的な特徴や部分的な特徴を具体的に描き、相手に確かなイメージを与えるなどの工夫を求めている。その際、自分の思いや考えが深まる契機となった出来事や場面、印象に残った言葉を会話文で再現したり、比喻表現を用いたりするという工夫などが考えられる。

○推敲、共有

カ 読み手に対して自分の思いや考えが効果的に伝わるように書かれているかなどを吟味して、文章全体を整えたり、読み手からの助言などを踏まえて、自分の文章の特長や課題を捉え直したりすること。

吟味の観点としては、表現の仕方(文体、述べ方、説明的文章の事実と意見の関係性、文学的な文章の描写と比喻などの表現技法など)、文章の構成や展開(統括型や尾括型や双括型、演繹法や帰納法など)、表現の技法(比喻、反復、倒置、省略、対句など)が適切に用いられているか、その効果はどうかなどを検討することである。表現の意図と整合しているかどうかを考えるだけでなく、読み手にどのように伝わるかという観点から、読み手からも助言をもらうなどして、自分の文章の特長や課題を捉え直したりすることで、十分に検討を加えることが大切である。

② ①に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。

ア 社会的な話題や自己の将来などを題材に、自分の思いや考えについて、文章の種類を選んで書く活動。

イ 文章と図表や画像などを関係付けながら、企画書や報告書などを作成する活動。

ウ 説明書や報告書の内容を、目的や読み手に応じて再構成し、広報資料などの別の形式に書き換える活動。

エ 紹介、連絡、依頼などの実務的な手紙や電子メールを書く活動。

オ 設定した題材について多様な資料を集め、調べたことを整理したり話し合ったりして、自分や集団の意見を提案書などにまとめる活動。

カ 異なる世代の人や初対面の人にインタビューをするなどして聞いたことを、報告書などにまとめる活動。

実社会で話題になる出来事(政治、科学、文化、芸術など)についての意見文や小論文をはじめ、自己の将来などを題材にした人生物語の作成、随筆、虚構の作文など多様な文章を書く活動が示されている。また、企画書や報告書などを図表や画像など資料と関係づけながら作成する活動、説明書や報告書を必要に応じて広報資料などの別の形式に書き換える活動が示されている。なお、図表や画像などを作成する際に、それ自体が学習の目的にならないように注意する必要がある。その他に、実務的な手紙や電子メール(例えば、本の紹介や広告などの紹介、個人あての文書や図書館だよりなどの連絡、派遣依頼や参加依頼など)を書く活動、提案書や報告書をまとめる活動が示されている。これらの活動をするに当たり、多様な資料を収集する際には、インターネットの利用や、学校図書館や地域の施設などの活用、情報科や司書、地域の方々等との連携などが考えられる。これらの学習を通して、目的や想定される読み手によってどう表現するのが適切かを理解させるとともに、その方法を習得できることが求められる。

(4) 内容の取扱い

① 内容の〔思考力、判断力、表現力等〕における授業時数については、次の事項に配慮するものとする。

ア 「A話すこと・聞くこと」に関する指導については、40～50単位時間程度を配当するものとし、計画的に指導すること。

実際に話したり、聞いたり、話し合ったりしている時間だけではなく、話題について検討したり、資料をまとめたりする時間なども含めている。また、40～50単位時間と幅があるのは、学校や生徒の実態に応じて弾力的な指導を可能とするためである。各学校で指導のねらいを明確にした年間の指導と評価の計画を策定することが重要である。

イ 「B書くこと」に関する指導については、90～100単位時間程度を配当するものとし、計画的に指導すること。

実際に文章を書いている時間だけではなく、題材を選んだり、参考となる文章や資料を読んだり、情報を整理したりする時間も含めている。また、90～100単位時間と幅があるのは、前項と同様の理由からである。

② 内容の〔思考力、判断力、表現力等〕に関する指導については、次の事項に配慮するものとする。

ア 「A話すこと・聞くこと」に関する指導については、必要に応じて、発声や発音の 仕方、話す速度などを扱うこと。

発声や発音の仕方、話す速度などについては、相手に正確に内容を伝える上で重要であるので、親しみやすく効果的なものを用いることが大切である。演劇やアナウンスの指導法を活用することは良い方法であるが、専門的なアナウンスの指導に陥らないように留意する必要がある。

イ 「B書くこと」に関する指導については、必要に応じて、文章の形式などを扱うこと。

実用の文章は、一定の形式がある。これらを習得すると文章作成の効率化が期待できるので、親しみやすく効果的なものを用いることが大切である。形式にこだわり過ぎて、生徒の自由な発想や表現、創造の意欲を損なうことがないように留意する必要がある。

③ 教材については、次の事項に留意するものとする。

ア 内容の〔思考力、判断力、表現力等〕の「A話すこと・聞くこと」の教材は、必要に応じて、音声や画像の資料などを用いることができること。

音声は、即時的に消えていくことが特徴であるので、スピーチや面接や話し合いの仕方を振り返る際に、機器（ビデオ・携帯電話の録画機能など）を用いて録音あるいは録画したものを教材として用いることが効果的である。一方、画像は、国語科の指導においては、言語による情報をより分かりやすくするための補完的な役割を果たすものである。音声や画像の特徴を理解した上で、効果的に用いることが大切である。

イ 内容の〔思考力、判断力、表現力等〕の「A話すこと・聞くこと」及び「B書くこと」のそれぞれの②に掲げる言語活動が十分行われるよう教材を選定すること。

生徒の実態に応じて適切な教材を作成し、選定することで、主体的・対話的で深い学びが促進され、必要な情報を収集し活用して、報告や発表をするな

どの積極的な言語活動につながる。ゆえに、適切な教材選定が重要である。また、育成する資質・能力のためにはどのような言語活動が適切かを考えて活動を選定して指導したい。なお、育成する資質・能力と言語活動とは必ずしも一致しない点に注意したい。

6 「古典探究」

(1) 性格及び目標

国際化や情報化の急速な進展に伴い、未来がますます予測困難になりつつある中、社会でよりよく生きるためには、我が国の文化や伝統に裏付けられた教養としての古典の価値を再認識し、自己の在り方生き方を見つめ直す契機とすることが重要である。

このことを踏まえ「古典探究」では、古典を主体的に読み深めることで伝統と文化の基盤としての古典の重要性を理解し、自分と社会にとっての古典の意義や価値について探究する資質・能力の育成を重視し、古典を通して伝え合う力を高めたり、生涯にわたって古典に親しみ自己を向上させたりすることをねらいとしている。さらに、伝統的な言語文化に関する課題を設定して探究したり、我が国の文化と中国など外国の文化との関係について考察したりして、古典への興味や関心を広げることを重視している。

以下の目標では、国語科の目標を踏まえて生涯にわたって社会生活を充実させるために、古典に親しみ、言葉を通して先人との関わることが示されている。授業では、ただ逐語訳をするだけで終わることがないように、学習する内容が実社会や自己の向上のためにどのように生かされるのかを意識させたい。

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の伝統的な言語文化に対する理解を深めることができるようにする。
- (2) 論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、古典などを通じた先人のものの見方、感じ方、考え方との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。
- (3) 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって古典に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。

(2) 内容

【知識及び技能】

① 言葉の特徴や使い方に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

○語彙

ア 古典に用いられている語句の意味や用法を理解し、古典を読むために必要な語句の量を増すことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすること。

現代の言葉との相違点と共通点、意味の広がり、用法に着目して理解を深めることは、語句の量を増すとともに、古典のみならず現代の言葉に対する語感を磨き語彙を豊かにすることにもつながるので重要である(例えば、「あはれ」や「あたらし」などは現代の言葉とは意味が異なる)。なお、古典を読む際は、現代語訳や辞書の適切な活用、現代の言葉との比較対照を通して、古典を読むことへの抵抗を少なくするなど工夫することが必要である。語句だけの指導にとどまらず、作品の理解につながることを求めている。

○文や文章

イ 古典の作品や文章の種類とその特徴について理解を深めること。

ウ 古典の文の成分の順序や照応、文章の構成や展開の仕方について理解を深めること。

イでは、多種多様な古典の形態の理解を深めることを求めている。例えば、歌物語には、和歌にまつわる物語、章段による構成、会話と地の文、統一的な主人公の有無などの特徴がある。その理解を深めていく中で、古典の文章の構成や展開の仕方などを的確に捉えることや、古典に特有な表現に注意して内容を的確に捉えること、書き手の考えや目的、意図を捉えて内容を解釈することなどにつなげていきたい。既存の知識の理解を通じて、生徒の気付きを重視し、古典への興味関心を広げたい。

ウでは、語順(主語、述語、修飾語などの並ぶ順序)や照応(主語と述語との照応など)や文の関係性、段落相互の関係や文章の構成や展開に着目して古典の文章を読むことが重要である。内容の正確な把握や深い理解にとって不可欠なことでもあるので、細部にだけ着目するのではなく、文章全体を意識することを求めている。

○表現の技法

エ 古典の作品や文章に表れている、言葉の響きやリズム、修辞などの表現の特色について理解を深めること。

古典は、言葉の響きやリズムを工夫し、修辞などの表現技巧を用いることで、書き手や文章中の人物

の思想や感情が、それにふさわしい言葉で表現されている。例えば、和歌(五七調や七五調)や漢詩(四言、五言、七言など)の音数律によって文章全体に独特のリズム感を生み出して、枕詞、序詞、掛詞、縁語などの修辞法を用いたりすることで、書き手が自分のものの見方、感じ方、考え方をより効果的に表現している。古典に親しむためには、言葉の響きやリズム、修辞などの表現の特色を捉え、思想や感情などがどのように表現されているかを理解し、巧みな描写、繊細な表現、簡潔な語調などを味わうことが重要である。

② 我が国の言語文化に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

○伝統的な言語文化

ア 古典などを読むことを通して、我が国の文化の特質や、我が国の文化と中国など外国の文化との関係について理解を深めること。

イ 古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまりについて理解を深めること。

アでは、古典などを読むことを通して、各時代における社会の姿、言語文化を生み出した人々のものの見方、感じ方、考え方に触れることで、我が国の文化の特質である人生観、社会観、自然観、美意識、言語観などの理解を深めることを求めている。また、近世までの我が国の言語、文学、思想などは外国、特に中国から強い影響を受けつつ独自の発展を遂げてきたことを理解することも古典学習の要である。関連する資料を調べたり、古典などを読み比べたりする学習も効果的である。

イでは、文語のきまりについて、文語文法のほか歴史的仮名遣いなども含め、元来中国の文語文である漢文を、国語として訓読する際に必要な訓点に関するきまりについての理解を深めることを求めている。必要に応じて体系的な指導も可能だが、古典を読むために必要なものに限定することとし、断片的な知識の習得に終始しないようにする必要がある。

○言葉の由来や変化、多様性

ウ 時間の経過による言葉の変化や、古典が現代の言葉の成り立ちにもたらした影響について理解を深めること。

古典の言葉と現代の言葉とは時間的な連続性があり(例えば、文語動詞の四段活用が口語では五段活用に変化したこと)、両者が時代を超えた一続きの言語文化であると捉えることは重要である。それが伝統的な言語文化に対する興味や関心を広げることにもつながる。なお、辞書や参考資料などを活用して、効果的な学習ができるように工夫する必要がある。

る。

○読書

エ 先人のものの見方、感じ方、考え方に親しみ、自分のものの見方、感じ方、考え方を豊かにする読書の意義と効用について理解を深めること。

情報化が進展する現代社会において、自分のものの見方、感じ方、考え方を豊かにするためには、幅広く古典に親しむことで読書の幅を広げ、読書の習慣を養うことが必要である。読書を通して、先人からの知識や情報を収集し活用し探究する力を身に付けることができる。読書は、長い歴史の中で蓄積されてきた先人の知識や知恵を継承し、豊かな人間性を涵養するのに不可欠なものである。このような読書の意義と効用について深く認識することで、生涯にわたる主体的な読書へとつなげたい。

〔思考力、判断力、表現力等〕

A 読むこと

① 読むことに関する次の事項を身に付けることができるよう指導する。

○構造と内容の把握

ア 文章の種類を踏まえて、構成や展開などを的確に捉えること。

古典の作品や文章の内容を正しく読み取るために、文章の種類（論理的・文学的・実用的）を踏まえ、文脈や段落相互の関係を捉えるなど、文章の構成や展開を把握することを求めている。古典学習が語句の意味の理解や、文の解釈に終始することのないように内容把握を目指して指導したい。

イ 文章の種類を踏まえて、古典特有の表現に注意して内容を的確に捉えること。

文章の種類に固有の特徴や修辞、文体などを正しく理解した上で、巧みな描写、繊細な表現などを味わいながら、書き手や登場人物の思想や感情、場面の設定、自然や季節の情景など、作品や文章の内容を正確に捉えることを求めている。例えば、言葉のリズム、音便や係り結びなどの文法上の現象、修辞などに注意することで古典特有の表現を理解し、的確な内容理解ができるようになる。その際、古典の知識を理解することに終始せず、言語活動を通して古典の魅力に気付かせ、主体的な読み取りができるように指導したい。

○精査・解釈【①】

ウ 必要に応じて書き手の考えや目的、意図を捉えて内容を解釈するとともに、文章の構成や展開、表現の特色について評価すること。

読み手の目的に応じて、テキスト内でのみ解釈をするのではなく、書き手の考えや目的、意図と関係

付けることで、書き手や登場人物の思想や感情、場面の設定、自然や季節の情景などといった内容の解釈を深めることができる。また、文章の構成や展開、表現の特色について価値判断することで、作品や文章を読み味わうことにつながる。これらは、伝統的な言語文化である古典の学習にとっては、大きな意義を持つ。

○精査・解釈【②】

エ 作品の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえながら古典などを読み、その内容の解釈を深め、作品の価値について考察すること。

作品が成立した背景（時代・時期、書き手・語り手の状況など）や、他の作品などとの関係を踏まえるのは、作品の内容の解釈を深める上で必要である。これは、古典の作品が他の作品を踏まえて成立することが多いためである。古典の原文のみならず、古典についての評論文なども活用して、古典の普遍的価値や、現代まで読み継がれてきた意味について考えを深め、その作品が自らにとってどのような価値をもつのかまで考えるように指導することが大切である。

○考えの形成、共有【①】

オ 古典の作品や文章について、内容や解釈を自分の知見と結び付け、考えを広げたり深めたりすること。

カ 古典の作品や文章などに表れているものの見方、感じ方、考え方を踏まえ、人間、社会、自然などに対する自分の考えを広げたり深めたりすること。

オでは、古典を読むことは、古典の作品や文章から一方的に知識や情報を受け取るという受け身の活動ではなく、主体的に古典と関わるということである。古典の文章や作品に表れた、人間、社会、自然などについての見方や考え方などを読み取り、それらを考察することを通して、自らの人間観、社会観、自然観などを広く確立して深めることが大切である。

カでは、古典作品には、様々な時代や背景によって、多様なものの見方などが表現されていることから、幅広く読むことを求めている。例えば、『平家物語』は因果観や無常観を基調として、登場人物の心情などが描かれているが、それを的確に把握するには、古典の作品や文章を主体的に幅広く考察することが大切である。その上で思考力や想像力を伸ばし、自分の考えを広げたり深めたりしていくことを求めている。古典に関連する様々な作品や文章（古典に関する解説・評論、古典を翻案した近代以降の小説・戯曲など）からものの見方や感じ方、考え方を的確に把握することが示されている。

○考えの形成，共有【②】

キ 関心をもった事柄に関連する様々な古典の作品や文章などを基に，自分のものの見方，感じ方，考え方を深めること。

ク 古典の作品や文章を多面的・多角的な視点から評価することを通して，我が国の言語文化について自分の考えを広げたり深めたりすること。

キでは，古典の作品や文章の題材やテーマなどに関連する課題を自ら設定し，古典の作品や文章を読んで探究することで，その解決を図る学習が効果的である。主体的に自分の読みを深める中で，思考力や想像力を伸ばし，心情を豊かにすることもできる。活動としては，関心を持った事柄に関連する同時代，または異なる時代の，様々な古典の作品や文章などを読み比べることなどが考えられる。そのためには，学校図書館などと連携した読書指導を行い，多くの古典の作品や文章などに親しむ機会を設けることが重要である。

クでは，古典の作品や文章を多面的・多角的な視点から評価するには，共時的な観点や通時的な観点から比較して評価することが効果的である。課題の設定は，時間的あるいは空間的な比較を通して生徒が考え，我が国の伝統的な言語文化の特色が明確になることで，我が国の言語文化について自分の考えを広げたり深めたりすることが可能になるものを選択したい。例えば，季節や人事をはじめ様々な事柄に対する先人のものの見方，感じ方，考え方について，現代の人々との違いや中国など外国の人々との違いなどの言語文化に直接関わるもののほか，自然や天候，先人の死生観，仕事や学問，恋愛と結婚など，現代社会にも共通するものも考えられる。

伝統的な言語文化についての課題を探究する学習は，我が国の言語文化についての理解を深めることに資する。その中で，他者や社会との関係のみならず，自己との対話を重ね，自分をより深めることにもつながる。主体的に言語文化に関する課題に立ち向かう態度を育成できるように指導したい。

② ①に示す事項については，例えば，次のような言語活動を通して指導するものとする。

ア 古典の作品や文章を読み，その内容や形式などに関して興味をもったことや疑問に感じたことについて，調べて発表したり議論したりする活動。

イ 同じ題材を取り上げた複数の古典の作品や文章を読み比べ，思想や感情などの共通点や相違点について論述したり発表したりする活動。

ウ 古典を読み，その語彙や表現の技法などを参考にして，和歌や俳諧，漢詩を創作したり，体験したこ

とや感じたことを文語で書いたりする活動。

エ 古典の作品について，その内容の解釈を踏まえて朗読する活動。

オ 古典の作品に関連のある事柄について様々な資料を調べ，その成果を発表したり報告書などにまとめたりする活動。

カ 古典の言葉を現代の言葉と比較し，その変遷について社会的背景と関連付けながら古典などを読み，分かったことや考えたことを短い論文などにまとめる活動。

キ 往来物や漢文の名句・名言などを読み，社会生活に役立つ知識の文例を集め，それらの現代における意義や価値などについて随筆などにまとめる活動。

生徒が主体的に，興味をもったり疑問に感じたりしたことについて調べて，発表したり議論したりする活動，古典作品や文章の読み比べによる発表や論述をする活動，古典の作品について，内容の解釈を踏まえて朗読する活動が示されており，どれも古典の内容を調べたことも含めて的確に把握した上で，発表などのまとめの活動が行われるように指導したい。活動形態も個人，ペア，グループ，ディベートなど状況に応じて活用したい。また，協調学習の手法も効果的である。他にも，文語の文章や和歌や漢詩の創作活動，古典語と現代語を比較し，その変遷などについて論文などにまとめる活動，古典に関する課題を設定し，様々な資料を調べ，探究して，成果を発表したり報告書やポスターなどにまとめたりする活動，古典の実用的な文例や名句・名言などの現代における意義や価値について，随筆などにまとめる活動が示されている。分かったことや考えたことを論文などにまとめるという表現活動を行うことは，学習の成果を筋道立ててまとめるとともに，一連の学習について成就感を味わわせ，古典について探究する意欲を更に高めることにもつながる。様々な資料を調べるにあたっては，学校図書館，地域の公共図書館，インターネットなどで参考となる書籍や資料などを調べたり，現地に出かけて取材したりするなど，様々な方法によって課題に関する情報を収集，整理し，それについて分析，考察を行うことが考えられる。その際，関係各所と十分な連携が取れるようにすることが重要である。

(4) 内容の取扱い

① 内容の[知識及び技能]に関する指導については，次の事項に配慮するものとする。

ア ②のイの指導については，[思考力，判断力，表現力等]の「A 読むこと」の指導に即して行い，必要に応じてある程度まとまった学習もできるように

すること。

文語文法の指導は、古典などを読むために必要な指導を、読むことの学習に即して行うという考え方である。文語文法を必要に応じて、ある程度まとめて指導することも可能だが、暗記に偏るなど、興味や関心を広げることを軽視した指導に陥らないように、生徒の実態に応じて配慮と工夫をする必要がある。なお、漢文の訓読の指導に際しても同様である。

② 内容の〔思考力、判断力、表現力等〕の「A読むこと」に関する指導については、次の事項に配慮するものとする。

ア 古文及び漢文の両方を取り上げるものとし、一方に偏らないようにすること。

古文と漢文は、我が国の古典として共に重要であり、両方を取り上げて生徒に学習させることを求めている。そこで、いずれか一方に多くの時間をかけたり、取扱い方に深淺が生じたりすることがないように配慮し、全体として両者をバランスよく指導する必要がある。

イ 古典を読み深めるため、音読、朗読、暗唱などを取り入れること。

音読によって、古典の文章の特有のリズムに気付いたり、朗読することによって、読みが深まったり、暗唱を行うことで、より感情豊かに表現できる。こうした活動は、古典の学習には効果的である。指導に当たっては、音読、朗読、暗唱などの活動そのものが目的となることがないように、古典を読み深めるためというねらいに留意し、計画的に取り入れる必要がある。

ウ 必要に応じて、古典の変遷を扱うこと。

読んだ作品の背景について理解を深めることが、主体的で多面的・多角的な視点からの読書にも結び付いていく。このことを踏まえ、生徒の発達の段階や科目の趣旨などを考慮して、作品や文章の内容や特質を理解するために、必要に応じて近代以前の文章史や文学史を取り扱いたい。

③ 教材については、次の事項に留意するものとする。

ア 内容の〔思考力、判断力、表現力等〕の「A読むこと」の教材は、古典としての古文及び漢文とし、日本漢文を含めるとともに、論理的に考える力を伸ばすよう、古典における論理的な文章を取り上げること。また、必要に応じて、近代以降の文語文や漢詩文、古典についての評論文などを用いることができること。

日本漢文とは、上代から近世に至るまでの間に日本人がつくった漢詩と漢文とをいう。我が国の文化において漢文が大きな役割を果たしてきたことや、

日本人の思想や感情などが、漢語、漢文を通して表現される場合も少なくなかったことなどを考え併せると、日本漢文の適切な活用を図る必要がある。また、近代以降の文語文や漢詩文、古典についての評論文などは、必要に応じて、指導のねらい、生徒の興味・関心、指導の段階や時期などに配慮し、親しみやすく効果的なものを用いるようにしたい。科目の性格上、論理的な思考力を伸ばすために、文学的な文章に偏ることなく、論理的な文章(歌論や俳論、漢文の思想など)も教材として積極的に取り上げたい。

イ 内容の〔思考力、判断力、表現力等〕の「A読むこと」の②に掲げる言語活動が十分行われるよう教材を選定すること。

ウ 教材は、言語文化の変遷について理解を深める学習に資するよう、文章の種類、長短や難易などに配慮して適当な部分を取り上げること。

古典を読む能力を養うためには、生徒の発達の段階や指導の時期に即応して、幅広いジャンルの文章を取り上げ、長短難易様々なものをバランスよく取り上げ、その配列を工夫するなどの配慮が必要である。